Still,

ラヴィ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｔｉｌｌ，

【Ｎコード】
Ｎ９３８３Ｔ

【作者名】
ラヴィ太

【あらすじ】
仕事のストレスにより休職中の西本明。病院からの帰路。「こんな人生なんて・・・」一瞬でも考えたのがいけなかったのか、トラックに轢かれ意識を失う。その後、夢の中に出てきた正体不明の使者に言われた。命を軽く見てるんじゃないか、と。「女として生きることで、少しは生の重みを見直せると嬉しい」そう言い残して明の意識は途切れる。目が覚めた明は何もかも記憶を無くしていた。男だったことさえも知らずに――　死にたがりだった明は何を見つけるのか。日常を描いていく物語。

プロローグ

透けるような青空の下、男は歩行者用通路を歩いていた。足取りは淡々としてるが、どこか夢遊病者のような頼りなさ。彼が横を向けばそこは国道。行き交う車体が見える。

西本明（にしもとあきら）は深い深い溜息をついた。このまま自分は社会復帰出来るんだろうか、と諦めにも似たその空気は、誰に届くこともなく霧散していく。

明は現在、ＩＴ企業の正社員である。毎日の終電近くまでの残業と、ひと時の休息すら与えてくれない休日出勤。果ては上司からの理不尽なまでのパワハラ。ＩＴ業界には仕事内容にもよるが、忙しさに波がある。

「いつか終わる」そう思いながら日々を過ごしてきた。それが３ヶ月続いた。

何故、今日のような平日に意味も無く歩き回っているのか。結局耐え切れなかったのだ。荒れ狂う忙殺とクライアントからの重圧。日増しに病んでいく自身の心。心療内科へ通う自分。明はほんの２ヶ月前を思い返してみる。

ある平日の朝。明は布団から出ることが出来なかった。正確には身体を満足に動かす事ができなかった。気だるい身体と醒めない脳は、きっと疲れからくる風邪かなにかだろう、という結論に至った。

２時間ほど経ってようやく身体が動くようになってきた。会社へは体調不良で遅刻する旨の連絡を入れて、朝食も食べずに家を出発

した。
その日は多少の辛さはあったものの、問題なく業務を終わらせることが出来た。
翌朝も昨日と同様、身体が動かずに布団から出られなかった。二日連続で遅刻するとなると、上司に何を言われるか分かったものではない。そんな考えが過ぎり、余計に出勤しなくてはと思った。しかしその使命感とは逆に吐き気まで催してきた。耐え切れずに嘔吐してしまい、フローリングの床を汚してしまった。

後日病院へ行って判明したのは、身体には異常が無いことだった。となれば残る可能性は、簡易な検査では解明しにくい難解な病気か、あるいは心の問題かどちらかであった。それを聞いて明は「あぁ、きっと後者だな」と他人事のように思った。心当たりが多すぎたのだ。そうして心療内科への通院が始まった。

国道を眺めながら明は思った。自分はこの世界に居てもいいのか、と。毎日忙殺されるだけの毎日で、日々の楽しみもない。
「それならいっそ……」呟いた声はまるで自分が発した声じゃない気がした。最後までは言いたくない。一瞬巡った思考を、軽く頭を振って打ち消した。自分にそんな勇気は無いはずだ。

そう考えた瞬間――

「危ない・・・・・・っ！！」

誰かの声が響いた。
彼は考え事をしながら歩いていたために、道を大きく外していた。
気づいた時には道路の真中に居た。
明の目前には急ブレーキを掛けながらも猛然と迫るトラック。
彼は動かなかった。目を瞑る。それは傍目には襲い来るトラックに驚いて動けなくなっているようにも見えた。

明はふいに腕を掴まれる感触に気づいた。はっとして目を開けると制服に身を包んだ少女が、彼を歩行者用通路へ引きずろうとしていたのだ。
自分なんか助けなくて良いから、この娘を危険から遠ざけなければ、と思った。
次の瞬間に明はふわりとした浮遊感を感じた。彼の網膜には、見知らぬ男を真剣な表情で助けようとする少女の顔が、焼き付いた。
そうして明は意識を手放した。

プロローグ（後書き）

初めまして！
初の連載ですが、マイペースにやっていきます。
よろしくお願いします。

第1話　～きっと夢～（前書き）

ふと思いました。タイトル「Ｓｔｉｌｌ，」ってカンマ付いてるじゃないですか。こちらはタイプミスだと思っている方がいらっしゃるのでは・・・？なんて。カンマ含めてタイトルですので！
こら、そこ！どーでも良いとか言わない！笑

第1話　～きっと夢～

明はふわふわと宙に漂うような無重力感を感じた。
辺りは薄暗く、上下左右何も無い。ただ浮いているだけの感覚。
彼は身体を動かそうと試みたが、動けているのかさえ分からなかった。神経の感覚もないのか、と思った。

そうこうしている内に前方の空間が歪んだような気がした。薄暗く自分の感覚に自信が持てなかった。
その歪んだ空間から犬が出てきた。耳が垂れていて、胴長短足の愛らしい姿だった。黒を基調として、所々に赤茶色の毛色が顔を覗かせる。その姿からはミニチュアダックスフンドを思わせた。

「君は」

その犬が口を開いた。凛とした中性的な声質だった。
一瞬驚いた明だったが、すぐに「なるほど、これは夢の中だな」と思い至った。その証拠に先ほどから動けないままの上、声も出せないようだった。

「君は、命の重さを分かってないね。」犬は呆れるような口調でそう言い放った。表情が変わらないので、口調でしか判断が出来ない。
明は耳を塞ぎたくなった。夢の中でまで説教されるのはごめんだ、と思った。それに自分は自殺しようとしたわけではない。死ぬかもしれない場面で諦めの色を想っただけだ。人によってはそれを自殺

と考えるかも知れないが。
反論しようとしたが、やはり何も喋ることが出来なかった。

「何か言いたそうな眼をしているね。」そう言うと少し間を空けた。沈黙が降りる。犬はまたすぐに口を開いた。
「説教されるより体験した方が早いな、きっと……」
まるで自己解決。どうあっても自分の意見は流されるのだ。明はそう思った。犬は続ける。

「人間の性には男性と女性の二つがある。君は二十数年男性として生きて、そして成人したね。でもそれでやっと半分だ。もう一つの性である女性としても生きるんだ。そうしてやっと人というモノを理解する。命の重みも少しだけ分かる。それでもほんの少しだ。そのほんの少しでもいいから、生を……性を……世を全うしようと思ってもらえると嬉しい」

ゆっくりとした言い方で、淀み無く言い終えた。そこまでまくし立て所で、じぃと明を見た。値踏みするような観察するような不躾な視線。身を捩って避けたかったと、動かない身体で明は思う。
犬は納得したように「うん」と一言。再び空間を歪ませて消えていった。後に残ったのは静けさだけ。
明は言われた事を整理しようと思ったが、うまく出来なかった。それは非現実的な言葉ばかり並べられたためだった。整理しようにも、意味が良く分からなかった。

それでも最後の言葉だけは妙に頭に残った。それは図星――とも

言えよう。少なくとも自分には生を全うしよう、という思いは殆ど無かったのだから。

明は前方から放たれる光を見た。５メートル程の距離だろうか。眼を凝らしてみると、それは細長い楕円形で、彼の直径を軽く飲み込むほどだった。

そこでふと気づく。身体が動かせるのだ。浮遊感も無くなり、地に足を着いている感覚がじわじわと沸いてきた。

景色が上下左右なにも無いのは変わらなかったが、ひとまず楕円形の輝く扉まで歩いてみる。誘われるように扉の前に着いた。まるで自分は灯りに吸い寄せられる蛾のようだと思った。

そこまで来て明はどうしようかと悩んだ。扉を潜らないとこの夢は醒めないのだろうか。潜ってしまったら最後、どうにかなってしまいそうな、後戻り出来ないような何とも言えない不安感が胸を締め付ける。

意を決したように口を一の形に結び、誰にともなく頷く。勢いを付けて肩から突っ込むようにして、扉を潜った。

視界が光で埋め尽くされて何も見えない。

少女が目を開けると、そこは見知らぬ部屋の天井だった。僅かなシミが見える。

彼女は鼻先に蒸れるような不快感を感じた。右手で触れてみると、それは呼吸器のようだった。すると、ここは病院で、自分は寝かされているのだろうかと思った。しかし、考えても考えても何故病院

で寝かされているのか分からなかった。

少女の身体はとても小柄で、１６０ｃｍも無いようだった。髪は腰近くまである薄い茶色のロングで、緩いウェーブが掛かっていた。すっと整った鼻梁と精悍な顔立ち、髪型と身長も相まって外国製のお人形を思わせた。

彼女が顔を上げてみると、見知らぬ女性が二人瞳に映った。一人は高校生位で、もう一人は大人の女性。歳、背格好、顔つきから言って恐らく親子だろうと思った。

少女は顔を上げた。二人は彼女が目覚めたと気づいたようだった。それを認めると、娘の方が駆け寄り、手をぎゅっと握ってきた。

「良かった！　気づいたのね」

「もう目を覚まさないかと思った」

母親の方も涙目になりながらも、心底ほっとした声音だった。

少女は困惑した表情を浮かべた。

「ねぇ、大丈夫なの？どこか痛いところは……？」

娘は心配そうに少女の顔を覗き込む。それがとても澄んだ目に見えて、少女ははっとした。

言うまいかの一瞬の逡巡。目が泳いでしまう。それでも前に進まないと思い口を開いた。

「あの……失礼ですが、どちら様でしょうか……？」

面識の無い相手故に、つい敬語になってしまった。それと同時に彼女は何か違和感を感じたが、それが何だか分からないまま意識の底へ埋もれてしまう。

娘はその言葉にぎょっとしたように、胸を詰まらせた。3秒程間が空き、溜まっていた涙が一気に溢れた。

第1話　～きっと夢～（後書き）

一応プロット的な構想は作ってあるんですけど、書く毎に何だか変化していってるような気がしないでもない。小説って難しいんだなー、と実感しますデス。

感想・誤字脱字の指摘があれば、お願いします！

第2話　～温もり～（前書き）

明らかな視点変更がある場合は”－1－”、”－2－”といった形で、区切りを付けました。頻度は多くありませんが、今後も出現する場合があります。

第2話　～温もり～

―1―

「あ……」

目の前でポロポロと涙を流している女性を見て、少女は自分が悪い事をしてしまったように感じた。きりきりとした罪悪感の中で、今放った言葉はこの場には適していなかったのだと知る。それでも理由は分からなかった。

突然の展開に思考が混乱へと陥る。彼女は言うべき言葉を捜したが、それは見つからなかった。

握られた手に温もりを感じながら、母親の肩越しに目をやると娘と視線がぶつかった。やはり彼女の方も流れてはいなかったが、目頭に光る雫が溜まっているのが分かった。何かをじっと我慢しているような顔で、少女を見つめた。

「え、えっと」

緊張で声が殆ど掠れていた。反射的に言ってしまった言葉だったため二の句が継げずに黙っていると、ついに娘の方がおずおずと口を開いた。

「ねぇ、本当に私達が分からないの？　冗談言ってるだけだよね？」

試すような、何かを期待するような声。その期待には応えられない代わりに、少女は顔がを俯かせた。

少女は空虚な空間を見つめたまま。それに呼応するように、重々しい空気が部屋を包んだ。長方形のテーブルにある置き時計の、秒針を刻む音がやけに大きく響く。

「何とか言ってよ！　ねぇってば！」
腕に鈍い痛みが走り、少女は思わず顔を歪めてしまう。一歩前に出た娘が、少女の腕を強く掴んだからだった。
「止めなさい愛華（あいか）」母親が悲痛な表情のまま、右手で娘を制した。出来ることならば、自分も一緒になって叫びたがっているのを無理矢理に抑えているようにも見える。
愛華はその諭す声にも「だってぇ……だって」と、堪えきれなくなった涙を流していて、母親の胸に顔を埋めて嗚咽を漏らした。
母の藤宮彩乃（あやの）は、愛華の背を優しくさすった。
くぐもった声が響く度に、少女の罪悪感は比例して増すばかりだった。
少女は顔を上げることなく、力無く自らの肩を抱いた。

ひとしきりの沈黙を経て、やがて彩乃がそれを破った。
「とにかく、先生を呼んでくるわ。大人しくしているのよ」彩乃は部屋を出て行った。

静まり返る室内。泣きはらして愛華は目が赤く腫れていた。
少女はその様子が痛々しくて、これ以上見ていられなくて、その原因を取り除きたく思った。
「何故、泣いているの？」と、相変わらず掠れた声で問う。
それを聞いた愛華は、問いに答えようと口を開きかけては閉じた。言いにくいのだろうか。組んだ指を胸の前に置いてモジモジとして

いる。やがて考えがまとまったのか、手を下ろしたながら少女に言った。

「一つ聞いても良い？」
「……うん」
「貴方は自分が誰か分かる？」
「そんな、自分が誰かなんて分かるに決まって……え？」

数秒の停止。少女は考え込むように黙った。そして一言。
「分からない。」
愛華は驚きの表情と共に口を閉ざした。少女は親子のことが分からない。それはその記憶が無いからだろう。では、少女は少女自身についての記憶があるのだろうか。

（分からない。自分は誰？　何者？　家族や友達は……？　自分の名前は？　家は？　分からない思い出せない）

「思い出せない」
ぽつりと、けれど今までより一際大きめな声で少女が呟いた。そうしてまた小さく思い出せない、と空気を振るわせた。
少女は頭を抱えながら小さく思い出せない、と繰り返していた。ふるふると振るわせる両の肩。その姿は弱々しく、今にも消え入りそうだった。
自我を失いつつある少女は唐突に暖かさを感じた。彼女が顔を上げると、愛華は泣き笑いの表情で、少女を抱きすくめていた。

「大丈夫だよ。私達が家族」

「家……族？」
「そう。貴方は私のお姉ちゃん」
「お姉ちゃん……？」
「どんなになってもお姉ちゃんはお姉ちゃんだよ」

すぅ、とシャンプーの甘い香りが少女の鼻腔をくすぐった。背中に回された手が暖かく感じる。
少女は不思議と安らぐのを感じながら、言われたことをオウム返しにしか出来なかった。どうやら身体の大きさが一回り程違うようで、身体全てとはいかないまでも、かなり大部分が包まれている心地よさ。
こんなにも暖かくて優しい気持ちに包まれるのなら、自分が誰かなんて分からなくて良いと錯覚するほどに安心した。
抱きしめられたまま、両手をストンと下ろす。肩の力が抜けていく。
そのままぴったり五分の時が静止した。その間中、彼女はずっと抱きしめられていた。

「ありがとう」
抱き合った状態のまま少女はそう言った。
その言葉を合図に愛華は抱擁の手を解いた。
「ありがとう」もう一度言って、少女は少し笑った。それは細めた瞼のまま口角を若干持ち上げた程度。
一般的に観てそれは華やぐような綺麗な笑顔ではない。

それでも――

今出来得る限りの、最高の笑顔に違いなかった。

それを受けて、愛華はやり切れないような、切ない表情をした。
そこで少女は改めて愛華の全体を見た。艶のある黒髪が長く、胸の辺りまで垂れている。下がった眉が愛らしいな、と少女は思った。

「お、目が覚めたようだね」
少女が声の発生源へ振り返ると、白衣を着た男が病室へ入ってきたところだった。
「先生をお連れしたわ」後ろに彩乃もいる。
医者は「岸間です。よろしく」と名乗った。岸間は４０代後半と思われた。髪は短髪に刈り込んであり、背が高い。きらりと光るメガネは、どちらかというと体育会系を思わせる装いを否定しているようだ。

さて、と言ったところで岸間は仕事を始める気のようだった。
手にしたクリップランプで、少女の瞳孔を検査する。
岸間は「よし、特に問題ないな」と言った。
少女はクリップランプを仕舞う岸間を見た。それに気づいた彼は、患者を安心させるかのように、にかっと歯を見せて笑った。
「いくつか、質問するから正直に答えてね」
「はい」

（その前に自分が病院にいる理由を知りたいんだけど……）
表情と声には出さずに少女は思った。

「自分の名前は分かるかい？」
「……分かりません」
岸間は首をドアの横に控えている愛華と彩乃に向けた。
「お二人が誰なのか分かる？」
そして彼は二人を差しながら言った。

「ごめんなさい。分からないです」
苦笑する岸間。「謝ることはない。じゃあこれとこれを持って」
そう言って取り出したのはノートとボールペンだった。
「五十音表って分かる？」
「あ、はい。」
二つ返事で、少女は”あいうえお”と紙の上をペンでなぞった。
ありがとう、と言いながら岸間は紙とペンを受け取り何か考えている。岸間は受け取ったノートに何か文字を書き込んで、それを少女に見せた。
「読んでみてごらん」
「え、えっと……藤宮朱里（ふじみやあかり）　あかりでいいのかな……？」
「うん、合っている。君の名前だよ」
そう言われて、朱里は頭の中で3度繰り返してみた。しかし、しっくり来る感触は得られなかった。
「大丈夫、今はそれでいい。ゆっくりと思い出すよ」岸間はくしゃくしゃと髪を撫でた。

同じ要領で、日常的な動作が出来るかどうか、いくつか試された。ペットボトルを渡されて、蓋が開けられるかどうか。窓に付いてるクレセント型の鍵を開け閉め出来るかどうか等、実に様々なことを試した。
その結果日常生活に支障はないようだった。忘れているのは人の名前、自分の名前、地名、友人関係や自分の家。自分の年齢さえも分からなかった。
質問が終わり、後は彩乃が岸間から話を聞いてくれることとなった。
「疲れたろう。少し休むといい」気遣うように言って、岸間は彩乃と病室を出ていった。
「お姉ちゃん」

愛華に呼ばれて、朱里は声のする方へ意識を向けた。
「また明日、お見舞いに来るからね」
「うん、ありがとう」
「あと……さっきは腕を掴んでゴメン。痛かったよね」
「そんなこと」
「あのね」
愛華が言いづらそうに眼を伏せた。
そうして意を決したように問う。
「お姉ちゃんって呼んでいいの？」
朱里がはっとしたように息を飲む。
今の朱里には残酷な言葉だろう。それでも愛華には大切なことだった。
大好きな姉がこれ以上遠くへ行ってしまわないよう。

「当たり前だよ」
朱里は心配させないよう努めて笑顔でそう答えた。
予想外の答えだったのか愛華は目を大きく見開いた。けれどすぐに、愛華は向日葵のような笑顔を咲かせて返事をした。
「また、明日ね！」
愛華はちょこんと手を振り、病室を出て行った。

岸間から話を聞いた彩乃も病室に戻ってきた。
辺りは暗く、既に二十一時を一刻程過ぎている。
「まだ寝てなかったのね」
「散々寝てたもの。疲れはあるけど、あんまり眠くはないかなぁ」
「あんまり無理しちゃ駄目よ」
それは娘を想う母の顔だった。それでも記憶に無いのは変わりなく、朱里は敬語にならないように気をつけた。
「ねぇ、朱里。あなたを見ていると、まるで違う人みたい」

「それは……」
自分のことを見知らぬ他人だと――そんな考えが朱里の脳裏を揺(ゆた)蕩(た)う。そんな思いを見透かしたかのように彩乃は続けた。
「聞いて。そんな朱里も新鮮でいいじゃない。今は空っぽなだけで……。あなたは周りの事は気にしないで養生するの。私達は家族なんだから頼って。ね？　お願い」
そんな短い会話の中だけで、今までの朱里はとても愛されていたのだと知って、涙が込み上げてきそうになる。
我慢しようとして、膝の上にあった両手に自然と力が入った。泣きそうになるのを堪えながら笑顔を作って言った。
「ありがとう。朱里は幸せな子だね」
「他人事みたいなこと言わないの」
朱里は額を人差し指で突かれる。漏れる苦笑と、柔らかい雰囲気。この世の全てが優しさで構成されているのではないかと思うほどだった。

その夜、病室のベッドで朱里は眠れない夜を過ごしていた。
横向きに寝ていたのを、寝返りをうって反対側へ体勢を変える。
自分は本当に藤宮朱里なのだろうか。いや、周りがそう言うのなら間違いないだろう。自分の記憶が無いせいで猜疑心が首をもたげているだけだ。こんな感情もいつか記憶が戻ったなら、笑い飛ばせるだろうか。
自分が何者であろうと、あの親子は悲しませたくないな、と思った。だから今の自分に自信が無くても、姉であり家族でありたいと思った。それは願いでもあった。

気になることは他にもあった。
岸間の問い掛けの中に、女性用の下着つまりブラジャーについて

聞かれた時のことだった。

「……ここで脱げってことですか？」

朱里は頬をうっすらと朱に染めて言った。つい眉が上がってしまう。

勿論付ける振りでいいから、服は脱がなくて良いと言われた。それでも付け方が分からず、答えられなかった。

例え記憶が無くても、一度覚えたら忘れない自転車の乗り方のように、身体に染み付いてるはずではないのか。岸間も不思議に思いながらも、他の動作確認へと移行していった。

いくら考えても、それがどんな意味を示しているのか、朱里には皆目検討も付かなかった。

そうして思考の海に溺れながら、いつの間にか眠りについていた。

―2―

一部始終を見てた何者かは、安心したように言った。

「後はきっと、自分で何とかするよね」

何者かが窓の縁から飛び降りた。

窓の外にある縁部分には、土の痕が残る。

それは肉球の形にも見えた。

第2話　～温もり～（後書き）

感想、評価、お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！

ユーザー登録自体が数日前に初めてしてみた、という超初心者なので使い方も勉強中です（汗

そのため、今サイトではどの程度の作品がどの程度の評価／感想数／お気に入り登録がされるのか、今一相場というものが分かりません。

でも！

単細胞なので喜んじゃいます。

とにかく感謝です。

拙い物語ですが、少しでもお楽しみ頂けたら幸いです。

第3話　～負けず嫌い～

－1－

「ん、うぅん……」
朝の起床時間となり、看護師が薄い黄色のカーテンを開け放った。しゃっ、とカーテンが移動する小気味良い音が響く。
差し込む朝日に、朱里の沈殿していた意識が少しだけ浮き立った。その意識へ更に追い討ちとばかり、女性看護師は声を掛けた。

「朝ですよー！　藤宮さん、起きる時間ですっ」はつらつとしたよく通る声だった。学生時代に運動部の女子マネージャーだったと言われても、納得がいくに違いない。
しかし、それでも朱里は起きなかった。「もう少しだけ。あと5分だけ」と、お決まりの台詞をのたまいながら、掛け布団に包まる。

女性看護師の平井は、肩を竦めて嘆息した。けれどそれは負の感情ではなかった。自分は仕事でこの娘を起こさなければならない。けれど、この愛らしいフランス人形のような少女を相手にすると、つい甘やかしたくなってしまうのだ。小さな子供を仕方なくあやすような、やれやれ、といった感情に近い。

そんな微笑ましい感情を引っ提げて、掛け布団に手を掛けてほんの少し剥がした。すると先ほどの微笑ましい感情は雪だるま式に加速度を上げた。

朱里はまるで赤ちゃんのように、膝を折り曲げて小さく丸まっていたのである。瞬きしたら音が鳴りそうなほど長い睫毛の付いた瞼を閉じて、幸せそうに安らいでいる天使がそこに居た。
思わず抱きしめたくなる衝動に駆られながらも、必死で平静を保った。何とか平常速度まで戻った脈拍。平井は肩を優しくゆすった。
「ほら、朝ごはん食べれなくなっちゃいますよ」
「はぁい……今起きます」
寝ぼけ眼(まなこ)を擦りながら、朱里は何とか身体を起こした。

看護師の平井は28歳の女性。都内の当病院に来てからもう3年が経っていた。
昨日、病院へ搬送された朱里は、意識こそ無かったものの外傷はほとんどなかった。
彼女の担当となった平井は身の回りの世話をしようと病室に入り、その際に初めて朱里を目にした。
その時に襲った衝撃は今も忘れられない。そこには筆舌に尽くすのも憚(はばか)られる程の美少女がいたのだから。
未だ意識を取り戻さない彼女の顔をまじまじと見つめながら、もし彼女が屈託の無い笑顔を向けてきたら卒倒するに違いない、と男子のような妄想を膨らませていたのが遠い昔のように思えた。

「おはよう、藤宮さん」
「おはようございます」
眠そうな顔をした朱里に、平井は挨拶をしてみた。平井は続け様に、若干日本人離れした顔つきでもきちんと日本語が通じることが嬉しい、といった旨を冗談混じり言ってみた。すると朱里は、頭の上にクエスチョンマークが踊るように首を傾(かし)げた。

（あぁ、首を傾げる仕草さえも可愛いっ。もう私病気かも……）

平井は人目も気にせずに、一人身悶えている。

そこでふと気づいた。

（ん？　あれ？　日本語は通じても、冗談は通じないのかな？）

平井はまぁいいや、と早速次の話題に移る。

胸のネームプレートを親指と人差し指で摘むようにして強調しながら「私はあなたの担当看護婦……いや、看護師です。平井と言います。よろしくね」

「あ、はい。お世話になります。平井さん」

ぺこり、と座ったままの姿勢で朱里は挨拶を返す。

「短い間だけど、貴女のような可愛らしいお嬢さんだと、私も頑張りたくなっちゃう」

平井の言葉に、朱里は眉を下げながら、頬を指で掻いた。

「え……っと、可愛いとか、よく分からないです」

「またまたぁ！　自分の顔も見たことないような事。あ……」

平井は何か思い出したように小さく声を上げた。

朱里は困ったような顔をしていた。

加虐的嗜好（しこう）の持ち主であれば、苛（いじ）めたくなるほどの雰囲気を醸し出している。

「ちょっと待ってくださいね」そう言って平井はドアに向かった。

ぱたりと戸が閉まる。

―2―

一人残された朱里は窓の外を眺めながら思案顔。整った目鼻に、きゅと結んだ桜色の唇。難しい顔をして考え込む姿もまた、香り立つ色香を放つ。

（何だろう？　あ、それより自分の状況を聞かなきゃ）

窓の外はこの病院を中心に、円周状の形で道が整備されている。家族に連れられて散歩を楽しむ患者が数組居た。

昨夜に考え事をしていたといっても、結局は答えなど出なかった。それはそうだ。情報が少なすぎる。どんなに考えてもそれは推測に過ぎない。知っている人に聞くしかなかった。

今の朱里は不安の塊だった。客観的どころか、内側からでさえも視ることの出来ない自分。無理やりにでも自らを固着しないと狂ってしまいそうになる。

昨夜も愛華が抱きしめてくれなかったら、自分は錯乱して酷く取り乱していたのではないか、と思った。

「僕、僕」

ぼそっ、と。隣に人が居たら聞き返されていただろう声量。

「私、わたし……あたし」

確かめるように、不確かな形をなぞるように。

試してみても期待した成果は得られず。真一文字に結んだ唇を少し窄(すぼ)めた。

完成させようとしたパズルのピースの中に、合わないピースが紛れていた場合、そのパズルはどうなるか。合わないピースはどこにも嵌ることなく、そのパズルは一生完成しないだろう。そんな気持ち悪さだけが残った。

部屋のドアが開いて、平井が戻ってきた。

朱里は燻っていた疑問をぶつけてみようと前屈みの姿勢で息を吸ったが、それよりも先に平井がハイ、と何かを差し出してきた。その勢いに押されて弓なりの姿勢に、腰が引けてしまった。それに伴い口が閉じてしまう。

差し出されたそれは縦に細長い姿見だった。差し出されても大きすぎて持てないと思った。

「あの、それは？」

当然の疑問符を相手に投げる。それを受け取って、平井は優しく微笑みながらいった。

「何って鏡です、鏡。ちょっと布団から降りて、立ってみてください」

「あ、なるほど。自分の顔を確認しろってことですね」

「そうです。そうしないと自覚の無い困ったちゃんが出来ちゃいますから」

からかうような調子に、朱里は目を細めて睨んだ。

「どういう意味ですか、それ」

「自覚のない美少女は、それだけで犯罪になり得ますからね」

目一杯凄んだつもりだったのに全く意に介さない平井をみて、朱里は自分に喧嘩は向いてないんだな、と思った。

（何がそんなに楽しいんだか、まったく……）

呆れ半分。もう半分は……なんだろう。朱里は自分でも分からず苦笑する。

嬉しそうな声を弾ませる平井を尻目に、朱里はベッドから降りてスリッパに足を通す。

平井が大きめの姿見を持って、倒れないように押さえてくれている。恐る恐る姿見へと近づいた。

「わっ」

それは感嘆の声か、未知の邂逅(かいこう)による恐怖の声か。混ざり合ってよく分からない。
鏡の中にはまるで異世界に出てくるお姫様のような少女がいた。
飾り気の無い患者服を纏って尚、その美麗さは欠けることなく輝いている。
朱里は鏡の中から見つめ返してくるお姫様の視線に耐え切れず、自ら目を逸らす。それに合わせて鏡の少女も同時に目を逸らす。
朱里は蒸気させた顔で気まずそうに俯いていた。

（凄い可愛かった。これが他人だったら絶対恋してるよ……。うわ、変な汗が）

熱くなった身体を鎮めようと、朱里はパタパタと手で自分の首周りを扇いだ。
「ほら、可愛いじゃないですか」
妙に嬉しそうな平井の声で朱里は、はっと我に返った。
乱れた焦点が定まる。

そうして放った言葉は――

「ふ、ふ、普通だと思いますけど」

負けず嫌いな朱里だった。

第3話　～負けず嫌い～（後書き）

どもです。作者です。
あれですよね……実はストーリー進んでない！
だってほら、平井さんに起こされて、鏡見せられただけですもの。

言えない。ただラストの朱里が強がるシーンを描きたかっただけの回だなんて、口が裂けても言えない……。
いやまぁ、タイトルに滲み出てますけど。
滲むどころかダダ漏れですけど。

誤字／脱字／文法について等のご指摘は大歓迎です！

第４話　～飛散する破片～

「ところで」
「はい」
話題を逸らす意図はなくとも、朱里は聞いてみることにした。今の朱里には必要なことだった。
「その、えっと、何で……わ」
「わ？」

そこで一旦、言葉が不自然に切れた。
不思議そうに見つめている平井の視線を受けて、朱里はしどろもどろになった。そして朱里はいった。

「あの、何で私は病院にいるんですか？」
やっと聞けた、と思った。ここに辿り着くまでに長い道のりだったように思えた。
もう一つ胸のつっかえが取れたと思ったのは、自分の一人称についてだった。先ほどの不自然な途切れは、自分を何と称していいのか迷ったためである。
朱里は外見上、間違いなく女性だ。通常であれば”私”が妥当である。しかし、朱里はどうしても自分が生粋の女性という感情を抱けなかった。結果として”私”という言い方に躊躇いが生まれた。
今は他人に対して不自然なく振舞いたい、という思いが優先され”私”を使用した。

問われた平井は意外そうな顔をして、朱里を見た。
「え？　まだ知らなかったんですか？」
「は、はい……。先生も家族も教えてくれなかったんです」
「そうなんだ」
「多分……ですけど。　言うタイミングが無かったというか、他にもっと大事なことがあったというか」
平井がどうしようかな、と漏らしたのが聞こえた。
静寂の帳が降りる。その口火を切ったのは朱里。
「隠さないでください」
「え、いや、隠そうとしてるわけじゃなくて……あんまり私も詳しい事は知らないから、無責任な言葉になっちゃうかもって思ったんです」
朱里の懇願するような上目遣いを前にして、顔を赤くした。朱里が生活していく上の人格形成で、したたかさを持つようになった場合、こうして手玉に取られて貢ぐ男が増えていくのかも知れない。

平井は観念したように溜息を一つ付き、分かりましたといった。
彼女は「私も詳細は聞いてないけど」と、先ほどと同じ意味の前置きをした上で、説明を開始した。

「藤宮さんは、交通事故に遭ってウチの病院に搬送されたんです」
「交通……事故」
朱里の息が一瞬止まる。
それは不吉な響きを孕んだ単語。
「はい。これは周りの目撃証言や事故現場の捜査から導き出されたものなんですけど、最初は男性がトラックに轢かれそうだったらしくて。それで藤宮さんは、その男性を助けようとして車道に入ったって聞きました」

朱里は視線を床に移した。
「自分に……そんな――」
続いた音は己を過小評価する言葉。

平井はその言葉に何も返そうとはせず、悲痛な面持ちのまま、説明を続けた。
目撃者の証言によると、助けようとはしたものの、朱里は男性に突き飛ばされそのまま頭を打ったらしい。それは事故に巻き込まないために仕方なかったようにも見えた、と証言者は言う。それでもトラックの車体は大き過ぎたため、二人とも巻き込まれてしまった。

そして朱里は問う。口調には動揺の色を湛えて。
「そ、それで、その男性はどうなったんですか？」
「……お亡くなりになりました。全身を強く打っていて、とても病院まではもたなかったそうです」

朱里は血の気がさっ、と引くのを感じた。

お亡くなりに、

り亡く　におな、

お　な、りに亡く

なお亡　り　に

く

ぐるぐると言葉が頭の中を全速力で駆け巡る。それらは遠心力でバラバラに分解された。脳全体に行き渡った呪詛のような言葉達は、やがてナイフのように変形して心を抉り始める。

「それって、私が助けられなかったから」

震えた声で朱里は唇を動かした。

それは誰に向けての言葉だったか。

朱里は瞳を潤ませた。まるでこの世の終わりを嘆くかのような様子だった。それを見て、平井は苦虫を潰したような表情をした。
今現在記憶が無いからといって、元々は見ず知らずの人を身を挺して助けようとする少女だった。その彼女が受けるショックなど、推して然るべしだったのだ。

「藤宮さん、それは、違います」
「だ、だって」
平井はゆっくりと、染み込ませるように否定の意を口にした。
「事故なんだから、藤宮さんに責任なんてあるわけないじゃないですか」
朱里からの反応は無い。壊れた人形のように生気の無い目をしていた。

平井は優しく語りかけるように言う。
「貴女は偶然事故に巻き込まれた患者さん。今は治療に専念しましょう？　そんなに思いつめていたら、治るものも治らなくなってしまいます」
かたっ、と足音がする。平井が一歩進んだ。
朱里は静かに顔をあげた。
「ね？」平井は朱里の肩に両手をそっと置いた。
「私、やっぱり……どこか悪いんですか？」
「まだ分からないです。先生が診たところ緊急性を要する怪我はありませんでした」
「そう、ですか……」
朱里はまだ納得がいかない様子だったが、平井はこれ以上フォローのしようが無いと悟ったのか、それ以上は何も言わなかった。

「さて、そろそろ朝ご飯の時間です」
平井は意識するように明るく言った。少なくとも、食事という行事は楽しいものでなければならない。人の気持ちの浮き沈みに何かしら原因があるとして、その原因が何であろうと人としての基本『衣食住』の精度を高めるのは、その原因を減らす基本的なファクターとなりえるのだから。

この病院での食事は二通りに分かれる。
一つは患者が食堂まで足を運び、既にテーブルへ用意された料理を食べる。
病院の場合、怪我や病気をしていることが『患者』を『患者』たらしめる要素の一つだ。そのため食堂まで移動が出来ない者もいる。
勿論、検査入院というだけで、実際は五体満足な全くの健常者も混じっているが。
対して、食堂まで移動が困難な場合は、病室まで食事が運ばれてくる。大きな滑車台に何セットもの食事を載せ、担当看護師がいくつもの病室を尋ねて歩くのだ。
朱里の場合は食堂まで行って食事をする。

そういえば、と平井は思い出したように朱里へ声を掛ける。
「藤宮さん。食堂までご案内しますね」
「あ、はい」
そわそわと朱里は落ち着かない様子で、辺りをきょろきょろと見渡す。それに気づいた平井は、まだ先ほどの件で気落ちしているの

だろうか、と心配そうな声を上げた。
「藤宮さん、どうかしましたか？　何か気になることが……？」
「大したことじゃないんですけど」
「けど？」　もじもじと、妙に恥ずかしそうに視線を逸らしながら朱里はいった。
「お手洗いの方を、先に案内してもらえると嬉しいです」
「あっ」
手の平を口に添える仕草をしながら、平井はしまった、といった。
「すみません、気が回らなくて」
慌てた様子で平井は謝罪を口にした。

「こちらです」
案内されたトイレの前。そこには女子用のアイコンが描かれている。

（やっぱり、女子用トイレだよね……）

どうしてこんなにも違和感を覚えるのか。朱里は余計に自分が分からなくなる。
すみません、と言って朱里は中へと入った。

中へ入ると壁に掛かっている正方形の鏡と水場が目に入った。蛇口部分は手動ではなく、センサーによる自動式だった。
横には個室が八つほどあり、無機質なドアが二つ閉まっていて、中に人がいることを教えてくれる。
朱里は空いていた一番奥へと歩を進めた。個室に入り施錠をした。かちゃり、と安心を知らせる音がする。

しかし便座を前に朱里は困惑した。どうすればよいのか。

（何でドキドキしてるんだろう）

いや、分かってる。患者服のパンツと下着を下ろして座ればいいのだ。頭では理解している。

パンツに手を掛ける。下着が顕（あら）わになる。

当然ながら、このような下着を履いた覚えは無かった。自分で履いたのでなければ、誰かに履かされたのだろうか。そう思うと顔から火が吹きそうになる感覚に襲われる。

下着の端と端を指に通そうとした。通ってしまえば、後はそれを下に引き下げるだけ。しかし、焦って上手く指が通らない。

「んッ……。何で……ッ」

それきり朱里は動きを止めてしまった。同時に時も止まったかのようだった。

目を閉じた。視界は真っ暗闇の世界に堕ちた。

停滞した時間（とき）の中で、彼女は先刻聞いた事故について思い出した。

（本当に自分は助けようとしたのかな。実際に直面しても……きっと怖くて、ぶるぶる震えて、ただただ観ているだけで、それを見届けた後にあまつさえ逃げ出すんじゃないかと思うのに……。）

閉じたままの瞼で想像してみた。けれどイメージは定まらなかった。
銀色の機械じみたトラックらしき物体は、顔にモザイクの掛かった青年に向けてひた走る。それは音もなく衝突し、筐体の破片を飛散させながら黒い煙を上げた。赤と黒と銀と褐色の肌が入り乱れて交ざり混ざる。
それらは曖昧な映像しか映さず、やはりそこに自分はいなかった。

朱里は諦めたように瞼を開いた。個室を照らす薄暗い灯りが視界に入る。
「まるで他人の身体みたい」静寂に耐え切れなくてつい口に出してしまった。
更に気恥ずかしくなって、周りをきょろきょろと見回してしまう。緩い癖っ毛が左右に揺れる。当然ながら誰もいなかった。

気を取り直して首を下に向けた。
そこには飾り気の無い純白の下着がちょこんと鎮座している。

「藤宮さん、大丈夫ですか？　具合悪くなったりしてないですか？」

突然ドアの向こうから心配そうな声がした。

「……ッ！！」

はっとした朱里は顔を上げた。急な問いかけに心臓が跳ね上がる。びくついた心で疑問に思う。何故、この個室にいると分かったの

だろうか。

胸を押さえながら深呼吸をした。少しだけ落ち着きを取り戻す。
朱里にはこの個室に入ってから時間の感覚が無かった。もしかしたら随分と時間が経ってしまっていて、何かあったのかと様子を見に来たのかも知れない。
大丈夫です、と返そうとして思いとどまり、こんこんと2回のノックで返した。安心したのか、足音が遠ざかっていく。
そうしてまた目下の難題へと取り掛かる。

両手にはじわり、と手汗が滲んでいた。
どうしても最後の一線が越えられない。
しかし、いつまでもこうしてはいられないと朱里は思った。
覚悟を決めて、えいっ、と可愛く気合一線。

「うぅ……」

朱里はたじろいだ。そこには赤の他人であれば間違いなく見れないであろう景色。
自分のモノなのに他人のモノの様な気がする。転じて、見ているのは自分なのに、他人に見られているような気もする。訳の分からない思いが交錯して、また体温が上がった。

しかしそこからは早かった。なるべく見ないようにして素早く用を足す。滴る雫の音さえも、誰かに聴こえてしまうのではないか、

と要らぬ心配までしてしまう。
解放感に満たされて何ともいえない気持ちになった。
下着を上げかけたところで、局部周辺に不快感を感じた。少し考えて備え付けの紙で丁寧に拭いた。

火照った身体で個室を出ると、空いている窓から風が入ってきた。今の朱里には心地良い。
周りに視線を通すと、やはりそこには平井の姿は無かった。溜息を付きながらこの先に待ち受ける、暗い未来を思った。一度の排泄にここまでの時間を掛けてしまっては、気疲れで倒れてしまうのではないかと危惧してしまう。

手を洗ってから、再度トイレ内全体に目を遣る。他の個室は全て空室となっているのに気づいた。

第４話　～飛散する破片～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読みいただいてありがとうございます。
また、お気に入り登録していただいた方も、ありがとうございます。
（ペコリ

さて。
『小説』というものは文字のみで内容を伝えるものですね。どの小説でも筆者が描いた世界を五十音表のいずれかに変換し、読者はそれらを読み解き、更に脳内妄想によって情景を膨らませていくと思います。通常そこに絵という補助機能は存在しない。
まぁ、ライトノベル等には挿絵が付いてある場合もありますが。
（※ラノベを非難する意図はございません。筆者も大好きです。）

今回のお話には、絵こそ付いていませんが視覚に訴えている場面があります。
お読みになった読者様であればお分かりになると思いますが、「お亡くなりに――」の部分ですね。
朱里の脳内でぐるり回って浸透していく様なのですが、それをあのような手法で描いてしまいました。

冒頭で申し上げたように、文字で表現する世界の中であの書き方は邪道ではないか、という所感を抱く方もいらっしゃるかもしれません。
そしてその考えは間違いではないとも言えます。

それは筆者自身が描きながら疑問に思ってしまったからです。
故に「あんな描き方は邪道だ！」という糾弾があれば、甘んじて受け止めるつもりです。

では何故疑問に思いつつも、そのような描き方をしてしまったのか。
それは――。

えぇ。
ただの遊び心です（＾ｐ＾）

痛い、やめて！
石を投げないで！

第5話　～艶めく戯れ～

「お待たせしました」

朱里が女子トイレから出ると、ドアより少し離れた位置に平井が待っていた。
待たせてしまったという意識から、気持ち足早に近づく。

「急かしてしまったみたいでごめんなさい」
平井は申し訳なさそうに苦笑を浮かべた。
どうやら、トイレの個室前まで声を掛けにきたことを言っているようだ。
「そ、そんなことないです」
ぶんぶんと両手を胸の前で交差させながら否定する朱里。
声を掛けに来たのは『何かあったのでは』という心配する思いからであり、そういった気遣いは大抵の場合嬉しく感じるもので、逆に恐縮してしまう思いに駆られる。

そんな朱里の様子をみて安心したのか、平井はにっこりと笑い掛けながら本来の目的地を告げる。
「さ、食堂に行きましょう」
「はい」
頷いた朱里は、ゆったりと歩を進める平井に付いて行った。

長めに感じる廊下を抜けると、エレベーターがあった。
それに乗り込むと、平井は地下1階のボタンを押下する。
反応した鉄の躯体はぶぅん、と低く地鳴りのような音を発しながら動き始めた。

「こちらが当院の食堂になります」
平井は右手の掌を外側に広げ、差し示すように言った。
彼女の表情はどこか誇らしげでさえある。

予想だにしていなかった景色が瞳に映り、うわぁ、と朱里は感嘆とした息を漏らした。

パステルカラーを基調とした外壁に、薄いベージュとダークブラウンのマス目状に区切られた、フローリングの床。
三十帖ほどの広さに長方系の白いテーブルがいくつも置かれている。
そして各テーブルには、肌色の足と薄いピンク色の背もたれが付いている椅子がある。
天井はかなりの高さで、吹き抜け構造かと思うほどの開放感に溢れていた。

「ウチの自慢なんです、ここ」
朱里の期待通りの反応に、平井は嬉々として小ネタを提供してくれる。

「とっても素敵ですね。落ち着いて食事が出来そう」そう同意する朱里。
そのまま絶景をうっとりと眺めた。

程よい満腹感で眠くなりそうなお腹を抱えて、朱里は病室へ戻る。
あの外観を裏切らない、非常に美味しい食事だった。

自らの病室へ差し掛かった所で、見知った顔があるのに朱里は気づいた。
その顔の主は部屋のドアを開けて、部屋内へ首を向けたまま固まっている。

「ごめん、食堂に行ってたんだ」
朱里は状況を察して、そう声を掛けた。
声を掛けられた愛華は、ほっとした様に朱里へ向き直って笑みを浮かべる。
「だから居なかったんだね」
「うん」
「調子はどう？」
どう、と問われて朱里は答えに窮する。身体であれば今の所は問題無いと思った。
対して心の方は――。
「大丈夫だよ。どこも痛い所は無い……あ」
朱里はそこで昨日と異なる違和感に気付く。

「その制服って……」
「ん？　これ？　これは学校の制服だよ」

言われて気付いた様に、愛華は自身が着ている学校の制服に目をやった。
愛華が着ているのは学校指定の制服のようだった。
白のブラウスにリボン、ネイビーブルーを放つチェックのプリーツスカート。アウターには黒のブレザーを羽織っていて、そこにはエンブレムの刺繍が飾ってあった。刺繍は扇型の形をしていて、中には小さな王冠がすまし顔をのぞかせている。それが中々に可愛らしい印象をもたらせているようだった。そのエンブレムを見て、朱里は何故かトランプの絵柄を思い出す。

（考えてみれば当たり前だけど、愛華ちゃんは学生だったんだ……自分も多分そうなんだろうなぁ）

「ねぇ、お姉ちゃん疲れちゃうでしょ？　部屋入ろうよ」
そう言って、愛華は姉の背中をぐいぐいと押した。そのままベッドへと座らせる。
ふかふかベッドの上からちんまりと正座で見下ろす朱里と、来客用の簡素な椅子から見上げる愛華。

で……何だっけ、と唇に人差し指を当てて呟く愛華。
そしてすぐに「そうそう、制服」と思い出す。
「うん。やっぱり学生だよね」

「そうだよ。やっぱり……まだ思い出せない？」
少し声のボリュームが落ちた。愛華の気遣う心がみえるようだった。朱里は力なく首を縦に振った。ばつの悪そうな顔をして愛華は言葉を継いだ。
「えっとね、私達は私立霜月（しもづき）学園高等学校の生徒。私は二年生でお姉ちゃんは三年生だよ」

そこからは愛華による、朱里の身辺講座が始まった。
家族のこと、学校のこと、友達のこと、普段の振る舞い、家のこと。
様々な事柄を興味深げに訊いては、朱里は喜怒哀楽の感情をくるくると動かした。
不安が八割以上を占めていた心は大分軽くなったように思えた。
もちろん、愛華とて全てを把握しているわけでは無いため、退院して実生活がスタートしたら、未知の事柄に遭遇して戸惑うこともあるだろう。

「今日はね、始業式だから行く時間がいつもより遅いんだ。だからその前に病院寄れたの」
それが何故こんなにも朝早く来れたかを尋ねた、愛華からの回答だった。
そして、彼女の説明から今は四月なんだな、と思った。
いくら学校が遅いといっても、朝なんていくら時間があっても足りない位にやることがあるだろう。特に女性には。そんな中でも自分への見舞いへきてくれたことを嬉しく感じる。

「あ、そうそう！」

愛華はぽむ、と両手を叩いた。

「ん？」

がさごそ、と音がする。どうやら彼女はバッグから何かを取り出しているようだった。

朱里が不思議に思いながら成り行きを見守っていると、大きめの紙袋が出てきた。

紙袋を差し出しながら「ふへへー」と、愛華。

「それはなぁに？」

お行儀の悪い笑い方を姉として注意すべきだろうか、と迷いながらも朱里は自身の疑問を優先してみる。

「おうちから、お姉ちゃんの着替え持ってきたよ」

「あ……」

言われて初めて気が付いた、というような声。

「ありがとう。忘れてたから助かる」

「え、こんな大事な事忘れてたの……？」

返す言葉も無かった。

それと同時に非常に助かったという安堵感。
何しろ下着の替えさえも無かったのだから。

しかし、それもつかの間――次の質問で朱里は目を丸くする。

「胸は大丈夫？」と。

愛華はさも当たり前の事の様に、笑顔を保ったまま言い放った。
質問の意味がよく分からずに返答出来ずにいると、突然彼女は姉の後ろへひゅるり、と回り込んだ。

朱里は仄かな甘い香りと首筋に当たる吐息に、身震いしそうになる。
不意を付かれた、と思ったのは吐息を受けた後だった。
正しい認識も出来ぬまま、自身の両脇から二本の腕が生えるのを見た。
ぬっ、と生え出た二本はそのまま、胸へと伸びて――。

「んっ、あぅ……」
「へっへーん。あ、ほらやっぱりブラしてないじゃない」

愛華はしたり顔で指摘をする。
しかし、朱里はそれどころではなかった。

「ちょっ、ダメ……だからっ」
「付けないと、形崩れちゃうでしょー」
「そん、な……事言っ、たって……ッ」

逃れようと身を捩って抵抗するが、一回り違う体格差に為す術も無く封じられる。
妹による愛のこもった蹂躙が始まった。
服の上から乳房を愛撫される度に、艶掛かった吐息が漏れ聴こえた。その声を自覚して、朱里はより深く羞恥に身を固くした。
揉みしだかれたそれは、ふにゃりふにゃり、と自由に形を変える。
愛華はその反応を楽しむように嬉しそうな表情をのぞかせる。

「はぁ、ん……っ」
次々と送り込まれてくる未知の刺激に抗うように、意識して声が出ないように唇を結ぶ。それでも喉元から滲み出る声は侵攻を止めない。
されるがままになろうと諦めたかけた朱里は、じわりじわりと込み上げてくる素性の分からない感覚が込み上げてくるのに気づいた。
「な、なにこれ……っ」
「お姉ちゃんどうしたの？」
分かりきった顔で尋ねるその顔は、まさしく天使のような悪魔の笑顔。
「分かんない！　けど……っ」

叫ぶように答えた朱里は、虚ろな目で空気を求めて口をパクパクと動かした。
何かくる、と身体が警鐘をかき鳴らしたが、そこで不意に刺激が止んだ。
「あ……」
電池が切れた玩具人形のように、がくんと頭が垂れた。
その声が名残惜しげにも聞こえたのは、愛華の気のせいだったのだろうか。

「もー、可愛いなぁお姉ちゃんは」
そう言うと、愛華は今まで揉みしだいていた手を腰へと回した。後ろから腰に手を回して、朱里を抱きすくめるような構図になった。ぶらんぶらん、と愛華が左右に揺れると、釣られて朱里の身体も左右に揺れる。
「本当可愛い。つい悪戯したくなっちゃうよね」
もうしたじゃん、という言葉が喉元までせり上がった。けれど文句を言うよりも息を整えたかった。
揺れがおさまると、ぼふっ、と朱里も道連れにベッドへ横たわった。二人してベッド上で横に向かい合いながら、見つめるような格好になる。
行き場を失った朱里の”ナニカ”は身体と感情の底に堕ちていった。彼女は深呼吸するように大きく肩で息をしていた。

「何すんだ」多少の時間差を感じたものの、やっと声を上げることが出来た。吊り上げた目で抗議の意思を示す。
「私より十センチは低いのに、胸だけ大きいなんてズルイよ」
そう言う愛華の目は笑っていた。答えになっていない、と朱里は

思った。
「そんなの知らない」
「だから、腹いせに揉んでみましたー」
ブラジャーの有無は口実だった。こんな理不尽が世の中にあっていいのだろうか、と白いシーツに顔を押し付けながら彼女は絶望した。

急に愛華は遠くを懐かしむように、目を細める。
「こんなことするのは、もう何回目かな。いつもお姉ちゃんは負けちゃうねっ」
その言葉から、彼女達姉妹にとってこれは日常の一つなのだ、と朱里は思った。女性同士の、姉妹同士のスキンシップというのはこれが当たり前なのか。今の彼女に判断はつかなかった。

（今更そんな慰められても、恥ずかしいものは恥ずかしいってば……）

「次やったら、怒るからね」朱里は羞恥心を誤魔化すように宣告した。
「そう言うのも、いつも通りだね」
とびきりの笑顔で言われ、これ以上の反論する気力を削がれる。
その言葉で朱里は『朱里』になれた気がした。偶然でも無意識でも彼女をなぞれた。たとえ一瞬でも良いんだ、と。

こんこん――

人為的な音が響いた。ドアを外側からノックする音だ。
穏やかで幸せな夢の中から、強制的に呼び戻させるような鋭さを伴っていた。
姉妹は二人して、いそいそとベッドに座りなおす。

「はい」
答えながらも朱里は不吉な予感がした。がちゃり、とドアが開く。
はたして姿を現したのは、５０代ほどの大柄な男性だった。彼は被っていた帽子を取って、胸の前に提げた。
突然の見知らぬ来訪者に朱里と愛華の視線が交錯した。その目はお互いに『知らない人だ』と訴えているのが分かる。

男性は二人を認めると、口を開いた。
「こちらに、藤宮朱里さんがいらっしゃる、と訊きまして」
よく通る重低音だった。
男性はアルマーニのスーツを着ていた。皺一つないくっきりとしたシルエットに、縁の無いメガネと口髭を生やしている。
ジェントルマン、と称するのに何の違和感も無い印象を抱かせる。

男性の声を受けて、朱里は小さく手を上げて名乗ろうとした。
しかしその前に彼は「あぁ、申し遅れました」と、気さくな笑顔を向けて続けた。

「わたくし、西本誠（まこと）と申します」
彼は軽く腰を折って挨拶をした。

「……ッ」
その瞬間、愛華が息を呑んだのに朱里は気付いた。
横に視線を移すと、床を見つめながら開いた瞳孔が頼りなく揺れている。異様な空気に居心地の悪さを感じた。
ひとまずは挨拶をしなくては、と名乗りを上げる。

「あのっ……藤宮朱里は私ですけども」
朱里は控えめに手を上げながら申し出た。

第5話　～艶めく戯れ～（後書き）

どもです。作者です。

すみません！

ジャンルを恋愛、としておきながら未だそのような要素が皆無ですね（汗

あと数話で退院となり日常生活へと展開する予定です。

朱里について少々。

元々は明だったわけですが、現在の朱里は『朱里』としての記憶も『明』としての記憶無く、『自分』というものが確立されておりません。故にキャラクターとしても淡白というか、個性的な部分が余り目立たない印象かと思います。

話数が進むにつれて、そちらがどのように変化していくか作者自身が楽しみにしていたりします。

第6話　～優しい嘘～

―1―

「藤宮朱里は私ですけども」

名乗り上げた声は、先が読めない不安に包まれている。
その名乗りを受けて、西本誠はより一層態度を柔らかくした。

「やはり、貴女でしたか」
部屋にいる女の子二人の内、一方は制服を着込み一方は患者服である。考えてみれば一目瞭然の話だった。
「この度は事故で遭われたそうで。だいじに至らず良かったです」
「お見舞いにいらしたのですか、ありがとうございます」
彼がどういった者なのか全く察しが付かず、かといってこのまま関係を尋ねるのも躊躇われた。
見舞いに訪れたのならば、少なくとも自分に対して悪意を持った人間でないと推測出来る。彼女はそこまで考え一応のお礼を返した。

しかし、どうしたものか、と思った。
愛華に訊こうにも本人を目の前にして訊けるわけがないし、正体不明では何を話していいかも分からなかった。
やはり、現在の自分は記憶を失っている、ということを話した方が良いのか。そこまで考え――

ドアががちゃりと開く。平井がこつこつと無機質な足音を響かせ

ながら部屋内へ入ってきた。
彼女は無言で部屋内をぐるりと見回すと、西本誠へ顔を向ける。
そしてそのまま彼の腕を掴む。

「すみません、西本さん。こちらへ来ていただけますか」

朱里はどきりとした。口調自体は静かであったが、あの平井が心なしか怒気を孕んでいるように見えたからだ。
目覚めてから初めて触れる、人間の強い負の感情だった。
それが今自分に向けられているわけではないが、それがいつか自分にも降り注ぐのでは、というネガティブな思いに駆られる。

平井に腕を掴まれた西本誠は、戸惑いの表情を浮かべながらも「え、えぇ構いませんが」と、受け答えしていた。
掴まれた腕は放されることなく、そのまま連行されていく。
朱里はその様子を呆然と見つめていた。意味が分からなかった。

「何だったんだろう……？」
独り言と混ざり合った質問が声に出た。しかし――
反応がなく、それは唯の独り言に成り下がった。

「……。愛華？」
「えっ、あっ、何！？」
一体何に対して狼狽しているんだろう、と思った。それを掘り下げたい衝動に突かれる。

「いやだって、見知らぬおじさんがお見舞いに来たと思ったら、平井さんにすぐ連れていかれて……」
そこまで言っても、まともな返事が返ってこない。
明らかに何かを隠しているような様子に、核心を突こうとメスを入れる。
「何か隠してる？」
ぴくっ、と愛華の肩が上ずった。
一拍置いて「い、いやだなぁ。そんな訳無いじゃない」と弁解する。
その置いた間こそが、肯定を意味すると彼女は気づいていない。
取り繕うような笑みを貼り付けているのも、逆に痛々しく感じた。

「西本誠さんって、私の何だろう？　愛華知ってるよね？」
このままでは納得の出来る解が得られない、と判断し質問を変えてみる。
「うん、っと……。あ！親戚の人だよ！」
愛華は目線を左上に向けながら、困ったように答えた。

「本当に？」
「うん。本当」
朱里は誤魔化された気がした。じぃ、と妹の瞳を見つめる。
真剣な表情でそれを続けた。その内根負けすると思ったのだ。
しかしその熱烈な視線を受けても、愛華の態度は変わらなかった。
相変わらずの狼狽色で、朱里の瞳を見つめ返していた。

「はぁ。分かった親戚の人でいいよ」

溜息を伴って先に折れたの朱里の方だった。
口調・態度・雰囲気どれを取っても明らかな嘘だ。
それは、言われた本人である彼女も感じ取る事が出来る程に顕著なものだった。
にも関わらず白状しないのはある種の決意が見え隠れする。開き直りにさえ見えた。
それならば、と暖簾に腕押しとばかりに諦めたのだ。

「でいいよ、じゃなくて親戚の人なの！」
「分かった分かった。きっとその内分かるよね。例えば学校の先生とか」

そこまで言って不意に彼の言葉を思い出した。フラッシュバックのように脳裏を掠める。

『わたくし、西本誠と申します――』

自己紹介をしていた。
通常、知り合いに対して自己紹介はしない。つまり――事故以前からも会った事の無い人物だったのではないか。
であれば、普通に彼と朱里の関係を問いたとしても問題無かったのではないか。

それでも、朱里が組み立てられた推論はそこまでだった。
他にも疑問は尽きないが、やはり机上の空論で終わってしまう。
気にはなるが、いつまでも執着していても仕方ないと思った。

「それに……」
「え？」
「ううん、何でもない」

本当に何でもないことのように、朱里は笑顔で首を振る。
意図的に隠し事をされるのは気分が悪かった。
しかし、過ごしたのが短い期間でも分かる。
彼女の家族ならば、その隠す意図の中に底意地の悪い感情は介在していないのだと。
そんな勘にも近いお告げが聴こえた気がした。

―２―

平井に連れられて西本誠が入ったのは、関係者以外立ち入り禁止の会議室のようだった。平井は同伴せず、廊下で待機つもりのようだ。
茶色い長方形の長テーブルに、キャスター付きの黒椅子、無駄に幅のあるホワイトボード。何の変哲も無い会議室の構造がそこには広がっていた。

彼がそこに入ると、まず目に付いたのは朱里を担当している医者だった。

「西本明さんを担当致しました、岸間です」
岸間は西本誠に気が付くと、下ろしていた腰を上げて頭を下げた。
「あ、これはこれは。西本です」
西本誠も同じように頭を下げる。
「西本さん」
「はい」
「今回の事故については、本当にお気の毒です」
「いえ。先生も尽力されたと思います」
医者は決まり文句のように悔やみの言葉を述べると、西本誠は恐縮した様子で言葉を返した。

「それで、何故私はこちらへ連れて来られたのでしょう？」
西本誠は当然の疑問をぶつける。
「すみません、何も言わずにこのような場所へお連れしてしまって。あの場では仕方がありませんでした。無礼をお許しください」
そこまでいってから、どうぞ、と岸間は着席を促した。彼はそれに従って席に着く。

「ではまず……西本さんは藤宮さんのお見舞いにいらしたのですか？」
岸間は質問をした。その声はあくまで事務的に徹しようとしている向きがある。
「えぇ。私は明の伯父であり、唯一の親族です」
答えてから西本誠は目を伏せた。

そして、それだけで岸間は全てを理解したように、瞳の奥を光らせた。
「なるほど」岸間は指を組んで、西本誠を見据える。「つまり――」
「明さんの親も既に他界している今、代わりに謝罪出来るのは私だから、ということでしょうか」
ずばり言い当てられて、西本誠は嘆息した。
「そういうことです。事故が怒った原因は明のようですから、きちんとした謝罪が必要かと思ったんです」

「お気持ちは分かりますが……」
岸間は難しい顔をした。逡巡しているようにもみえる。
彼は険しい表情のまま口を開いた。
「実は……藤宮さんは現在、記憶障害――つまり俗に言う記憶喪失の状態にあります」
西本誠は伏せていた顔を上げた。見開いた目で、その驚きと衝撃に息を呑んでいる。
「え、それは……」
辛うじてそれだけを声に出していたが、意味は成せていなかった。
「いいですか、よく聴いてください」
岸間のその声は暗に落ち着け、と言っているようだった。

「記憶障害の原因には大きく分けて、『外傷性』『心因性』『薬剤性』『認知症』等多く考えられます。今回は『薬剤性』はまずあり得ませんし、『認知症』も年齢からしてあり得ません。残る可能性は『外傷性』か『心因性』です。『外傷性』については頭を打った際の脳への損傷が原因ですね。これは今後精密検査を行います。で

は後の『心因性』はどうでしょうか」

岸間はそこまで一気にまくし立ててから、ふぅ、と息継ぎをした。
ペットボトルのお茶を口に含む。ごきゅ、と嚥下する音が響く。
静かなこの部屋では目立った。

「心因性というのは」
岸間は問うためにどうでしょうか、と言ったわけではなかった。
あくまで会話におけるテンポの一つで、自身がスムーズに喋るための潤滑剤だ。
そんな彼の真意など知るはずもなく、西本誠は『心因性』について答えようと口を開く。
「えぇ」
「ストレスとか、そういったことですよね？」
「まぁ間違ってはいませんね」

岸間はペットボトルの頭頂部――締まったままのキャップ部分を弄びながら答える。
「『心因性』はストレスやトラウマ等を起因とした意味を持ちます。つまり事故そのものの体験が、彼女の心には耐え切れなかった。耐え切れない心は壊れる前に自己防衛を張ります。それが全てを忘れることです。」
「そんなことが……」
西本誠は信じられない、といった面持ちで呟く。
「いえ、あくまで可能性の一つですが」

岸間は改めて西本誠に向き直った。西本誠はその気配を察して、僅かに背筋が伸ばした。

「そこでお願いがあります」

「はい」

低い空調が響く室内に、僅かな緊張が走った。

「貴方が西本明さんの親族だという事は暫く伏せて頂けないでしょうか」

西本誠はやはり、といった顔で険しい表情をした。それは彼にとって予想された言葉だったのか。

彼の返答も訊かずに、岸間は続けた。

「彼女は恐らく自分を責めたでしょう。自分のせいで明さんを死なせてしまった、と。だから心を閉ざして、事故の記憶も一緒に封じ込めた。そんな彼女が遺族とどんな顔をして会えばいいのか――」

「そう……ですね」

「これは医者としての判断です。どうかご協力頂けませんか」

そう懇願された彼は、得心した顔で頷いた。

「ありがとうございます」

同意を得て安心したのか、岸間は顔を綻ばせた。

「ふぅ」

西本誠が退出し、一人残った岸間は盛大に伸びをした。

「間一髪だったな……平井が訪問者名簿を見て気づかなかったら、

厄介な事になっていたかもしれない」
右手で自身の肩を揉み解しながら、一人ごちた。
背もたれの身体を預け、天井を仰ぎ見る。
やがて休憩が終わったのか、パンっ、と両手で頬を叩いて気合を入れると、彼は部屋を退出した。

第6話　～優しい嘘～（後書き）

どもです。作者です。
ここまでお読みいただいて、ありがとうございます。

後半はやや説明パートで退屈かもしれませんね（苦笑
しかし、愛華のついた嘘が何なのか推測出来る、大事なところでもあります。

ちなみに岸間のいう記憶喪失の原因やら、トラウマやら色々言ってますが……はてさて、実際はどうなのでしょうか。そもそも今記憶を無くしてるのは、明ですしね。

いや、しかし暑い。
これで七月頭とか信じられない。（白目剥きながら）

第7話　～ただいま～

「平井さん、岸間先生。大変お世話になりました」

朱里は丁寧にお辞儀をして、感謝の意を示す。

顔を上げると岸間はうん、と頷き次の言葉を継ぐ。

「何か違和感を感じたら、すぐ連絡して」

「はい」

西本誠が訪れた翌日に行った精密検査のオールグリーンを経て、更に翌日、朱里は晴れて退院する運びとなった。

緩やかなそよ風と、真っ青な快晴は祝福の門出。天気予報では雨だったはずが、今このときのためだけに雨雲はちょっとした気まぐれを起こしてくれたようだった。

朱里の隣には母の彩乃（あやの）、対面には平井と岸間が居る。二人は退院する朱里を病院の玄関口まで見送りに来ていた。

「本当に何とお礼を申し上げて良いか……」

彩乃はしきりに頭を下げながら、恐縮した態度をみせていた。それを制するように岸間は片手で手を横に振った。

「いえ、私は何もしておりません。元々ほぼ無傷でしたし」

そこで岸間は、隣にいる平井が一言も発しないことに気づいて声を上げる。

「どうした、平井」

その声に誘われるように、朱里は意識を傾けた。

「ふ、藤宮さん……っ」

平井以外の一堂全員がぎょっ、と目を剥く。
見れば、彼女は大きな瞳一杯に涙を浮かべていた。

「いつでも戻ってきてくださいねっ」
はっし、と朱里に抱きついて涙声。
「あらあら。すっかりお気に入り」
突然の衝撃と掛かる重力に、よろめきそうになりながらも踏みとどまった。ふわり包まれた胸の中でむにゅりと柔らかい感触がする。どう反応してよいか分からず、朱里は困ったように笑うしかなかった。

そして朱里は思う。自分は何か彼女にしてあげたことはあっただろうか、と。
在りし日に記憶を巡らす。やはり自分は与えられてばかりで、それ以外の答えは見つからない。それでもたった数日という短い期間であるのにも関わらず、こうして別れを惜しんでくれるのだ。
知らず平井の背中を彼女は宥めるようにさすっていた。

「こらこら、滅多な事言うもんじゃない。戻るだなんてまた事故れってことか？　縁起でもないぞ」
そう言う岸間も苦笑いで、彩乃へ向き直って更に補足をする。

「一応経過も気になるので来週辺り一度来てください」
「はい。そうさせていただきます」

さすっている手を止めると満足したのか、平井は身体を朱里から離した。彼女は鼻をすすりながら、目じりに浮かんでいる雫を人差し指で拭う。そこに溜まった、どんよりとした悲しみも一緒に吹き飛ばすかのようだった。

平井の手を両手で包みながら朱里は言う。

「ほら、平井さん。また遊びに行きますから。そしたらあの食堂で一緒にご飯食べましょう？」

その様子に朱里は思わず元気付けたくなったのだろう。

彼女の言葉に平井は、瞳を濡らしながら笑った。うんうん、と声にならない返事を繰り返していた。

建物の外。朱里は彩乃と並んで歩く。後ろを振り返ってみた。そこには未だ手を振り続けている平井がいた。

びゅ、と刹那的な風が吹きぬける。はためく髪を押さえながらぶんぶんと振り返してみる。すると更に強い力で振り返される。終わらない無限の応酬に腕が疲れそうになる頃、既に先を行っていた岸間が玄関口まで戻ってきて、彼女を引っ張っていった。

家へは電車で二駅移動し、下りてから徒歩六分の位置にある。その道中、彩乃は何かを見つけては朱里に絡む思い出話をしてくれた。出来るだけ頭にその場面が浮かぶように、時折懐かしむような目をしながら、けれど丁寧に話してくれた。

この公園で――。
あの曲がり角で――。
その書店で――。

しかし、どの話をされても、朱里は首を横に振ることしか出来なかった。
彩乃なりに早く記憶を取り戻して欲しいのだろう。少しでも情報を、押し込められた記憶を、薄れている情景を思い出してくれれば。そんな願いが込められているのだと朱里は思った。だからこそ、彼女なりの思いに応えることが出来なくて朱里は胸を痛めた。
せめて、というわけでは無いが朱里は時には質問も交えて、真摯な心で相槌を打った。

やがて大きな道に出た。多くの車が忙しそうにすれ違う。
朱里が前方に視線を移すと横断歩道があり、その先には路地が見えた。家はあの路地の奥だろうか、と彼女は何となく思った。
歩行者用の信号が、丁度赤から青に変わったところだった。さっさと渡れよ。すぐ赤に変えちまうぞ。そう言わんばかりの様相で突っ立ってる信号を認めて、朱里は歩を進めようとした。その時だった。

「あ……」

朱里は自分でも知らぬ間に、胸の鼓動が早まるのを感じた。
今まで通ってきた道は、全く知らないが故に漠然と脳を通り抜け

ていた。しかしここはどうだ。この道路に出た途端に言い知れぬ胸騒ぎに似た、ざわついた感触がこびりついて離れない。
自分はここを通ったことがあるのだろうか、と思った。しかし彼女はすぐにその考えを打ち消した。駅から自宅への通り道ならば、通った事が無いはずがなかった。

もやもやするこの感情の説明が出来なくてひどく気持ち悪い。
気づけば俯き気味の姿勢。いつの間にか軋み出していたこめかみの奥。鼓動がどくんどくん、と脈打つ度に痛覚が何かを訴えてくる。

知れ。掴め。思い出せ。
深層心理による水底からの直訴。表層心理はそれを押し留めようとするかのように反発を示す。そして両者の鍔迫り合いによって、痛みは更に増幅されていく。

「くぅ……っ」

ぷるぷると膝が震えた。
彼女は自身で折れる膝を脳裏に思い描いた。視界に靄が掛かり意識が遠のきそうになる。その瞬間――。

「ここは危ないから、さっさと行きましょう」
その声へ引き寄せられるように、視界が正常に戻っていくのを朱里は感じた。気が付くと、彩乃に手を連れられて歩き出していた。
「え？　ちょ……」

予期せぬ運動に足がすくわれそうになりながらも何とか歩幅を合わせた。
子供じゃないんだから、と繋がれた手を振り払うことも出来た。けれど思い詰めたような表情できっ、と前を向いて足を動かす彩乃を見ると何も言い出せなかった。
彩乃に連れられて道路から離れていくたびに、朱里の頭痛も薄れていった。

二人は道路を渡り、車一台半ほどの幅がある路地へ姿を消した。
道路脇には白を基調とした綺麗な花がそっと添えられていた。騒々しいエンジン音とすえた排気ガスの臭いの中、何もない砂漠に咲く一輪の花のようにそれは健気に咲いていて、もの悲しい景色を醸し出す。緑色のつぼみも混じり、それは一層の虚しさを増していくようだった。ゆらりゆらりと風に揺れる。
それは止むことなく、揺られ続けていた。個人を偲ぶように――故人を尊ぶように――。

駅から数分の住宅街の一角。一帯には似たような家々が立ち並んでいる。
華奢な首を動かして小奇麗な外観を見上げた。そして朱里が見上げるそこには、2階建ての一軒家が我が物顔で構えていた。
その建物は真っ白い外壁に灰色の屋根があり、二階にはいくつかの窓が見える。シンプルかつ機能的デザインで、住むには最適な環境といえた。

「ここが、私の家……？」
「えぇ」当然でしょ、と彩乃は腰に手を当てて不敵な笑みを添える。
彼女は人間二人分程度の幅を持つ門に手を掛けて、外側に押し開いた。乾いた音を鳴らしながら門が開かれる。その音と共に彼女は玄関のドアへ向かい、振り向きざまに朱里を手招く。
「何しているの？　早くいらっしゃい」
「あ、うん」
呼ばれた朱里は生返事一つ、母へ駆け寄った。

朱里は緊張していた。いくら自分の家だ、と言われても初めて赴く地を無心で踏み入ることは難しい。どうしても高鳴る胸を意識してしまう。
そんな胸中など知る由もなく、彩乃は淡々とバッグから取り出した鍵で扉を開いた。無機物な回転音が耳朶に響く。

開けたその先には玄関が広がっていた。隅には木製の下駄箱。見回すと赤いピンヒール、編み込みの黒いブーツ、カジュアルなスニーカー等、様々な靴が散らかっていた。それでも尚、十分にあるスペースは数組の来客には耐え得るのだろう。その先にはフローリングの廊下とリビングへの扉がある。
廊下とリビングの間には2階へ伸びる階段があった。

彩乃は電灯のスイッチへ手を伸ばした。日差しのみだった薄暗い玄関を、オレンジ色の照明が明るく照らす。
彼女は廊下の奥へと進み、リビングへの扉を開けるために手を掛けようとし、そこで手を止めた。未だ玄関の入り口で惚けたようにその仕草を見ていた朱里は、そんな自分にはっと気づき自分も家へ上がらなければと思い、足を一歩踏み出した。

「朱里。何か言うことは無い……？」
「えっ？」

唐突に始まった質問調に朱里は複雑な表情をした。彼女は脳内のデータベースへ検索をかけたが、何も引っかからなかった。
「ほら、帰ってきたら言うことあるじゃない」
しっとりとした笑みを浮かべる彩乃。とても慈愛に満ちた優しい目で朱里を見つめる。
あっ、と朱里は何か思いついたように口をついた。

「ただいま」
「うん、おかえりなさい」

言うべきことはごく当たり前の事だったが、朱里は難解な答えを想像していた。
外から見た外観は、まるで家自身が自分を招き入れたくないように、頑なに扉を閉ざしていると思い込んでいた。けれどそれは、臆病な彼女自身が作り出した幻想。

朱里の声に目を細めて一層笑みを濃くした彩乃の笑窪。それを見て朱里は嬉しくなった。そして、自分はここに足を踏み入れていいのかも知れない、と思った。

「あ、ねぇ。この玄関あんまり綺麗じゃないよね……？」
「あら。冗談が言えるようになったのね」
「うわぁ。逃げたよ」
「その内掃除するわ」
彩乃はくすくす、といたずらっぽく微笑んだ。

朱里の背中を、柔らかな春の日光が後押ししてくれる。肩を隠している長い髪に暖かみを感じながら、玄関をくぐった。

第7話　～ただいま～（後書き）

ども。作者です。

やっと退院しました。

それと母に名前が付きました。

最初は”母親”という表記で物語を進めましたが、それじゃいかんだろ、と思い直しまして。それに合わせて、名前の部分のみ第二話を修正しました。

ここまでお読みいただきありがとうございます！

次回以降も気が向いたらでよいので、お付き合いいただければ嬉しいです。

第1話　～お着替え～

玄関を上がって朱里が向かったのは、彩乃の居るリビングだった。
途中の廊下ではきょろきょろと周りを見回しながら歩いた。小さな額縁に風景画が飾られていた。どこかの岬のようだった。透き通るような水面に凸凹とした歪な空が映っていた。作者のサインと思しき直筆のペン痕があったが、彼女にとっては聞いたことの無い名前だった。

彩乃はストレッチをするように手をグーパーと繰り返して、手をほぐしていた。
ガラス製のローテーブルには、入院中に使っていた荷物が載っていた。本来は朱里のものであったが彩乃はその荷物を持ってくれていた。

「荷物ありがとう。重かった……よね？」
「そんなこと気にしないの。貴女は入院中ほとんど動けなかったのだし、筋力も落ちてるはずなんだから」
「う、うん」
朱里は伏し目がちに返事をした。
顔の幼さだけでいえば、ともすれば中学生3年生くらいには間違えられる可能性のある朱里に、退院した直後だと言われれば、彩乃でなくとも荷物を持ってあげたくなる気持ちになるだろう。華奢な身体と下がり気味の眉も相まって、更に庇護欲を掻き立てる。
彩乃はそんな彼女を見てしょうがないな、とでも言うように苦笑した。
「じゃあせめて、ひとまず、この荷物を自分の部屋へ置いていらっしゃい」

「分かった。あ、でも」
顔を上げた朱里は張り切るように息を弾ませた後、言い辛そうに言葉を区切った。その一瞬の間で彩乃は勘付いたように歩き出す。数日前より劇的な変化を遂げた娘に対して、どのように接するべきなのか、彼女なりに慣れてきているようだった。
「貴女の部屋はこっちよ」
その声を聞きながら、朱里は荷物を持って彩乃の背を追った。

二人は木目調のドアの前に立った。ドアには白いプラスチック製カードが紐で掛けられていた。そのカードには『朱里の部屋』と書かれている。隣には同様に『愛華の部屋』とあった。

「うわ、一杯」

まず朱里が目にしたのは、色とりどりのクッションだった。6帖半ほどのこの部屋は実にシンプルだ。薄型のテレビにベッド、机にはノートパソコンが無造作に置いてあり、本棚には流行りのコミックがずらりと並んでいる。部屋のコーディネイト自体に特徴的なものはないが、強いて挙げるとするならば、部屋内のいたる所に散乱しているヌイグルミやクッションだろう。中には一メートル近い高さを誇るものまであり、抱き枕の数には困らないと思われた。

「相変わらず凄い数ね」
うんざりしたように彩乃が声を出した。その声はこれ以上増やしてはいけない、と念を押しているようだった。
「私は知らないから」

朱里は自分のせいではない、と言いたかった。実際に収集した記憶は無い。それに近いニュアンスで抗議した。
「それなら、きっとこれ以上は増えないわね」
「えっと……多分」
彩乃が安心したように、一つ息を吐く。そして腰に手を当てて言った。
「まぁいっか。荷物の整理は後で一緒にやろう」
「あ、うん。お願い」

彩乃が部屋を出ようと廊下へ差し掛かった。直前、思い出したように振り向いて「お昼ご飯は何が良い？」と問う。問われた彼女はベッドへ視線を移して考えた。
「軽いものだったら、何でも」
「ん。オッケー」

一人になった部屋で荷物をベッドに置いた。腰を下ろして、部屋内をぐるりと1周見回した。
もしも、ピンクのカーテンやシートで彩られたファンシーな部屋模様だったらどうしよう、と。彼女はそんな心配をしていたのだった。しかし、その心配も杞憂に終わって内心で安堵している。確かにヌイグルミやクッションは多いが、こういった動物的なものを愛でる気持ちは誰でも持ち合わせているものだと思ったし、実際に目の当たりにしても不快感は無かった。

朱里はヌイグルミを弄っていた。マスコット的なキャラクターが人気で、熊をデザインしたものだった。感触が気持ち良くついつい手が伸びてしまう。

暫くそうしていたが、本棚にあるオレンジの背表紙に目が留まった。コミックと同じ列に並んでいるが、それだけ背表紙に何も描かれていなかった。絵も文字さえも無い。何となく気になって、本棚から取り出そうとした。

控えめなノックが響いた。

朱里はどきりとした。いけない事をしてしまって、それが大人に見つかってしまった瞬間の感覚に似ている。

「お昼ごはんだよ」

彩乃が顔をのぞかせた。わざわざ二階まで呼びに来てくれたのだった。

「は、はーい」

朱里は微妙な笑い顔でそう返事した。

昼食はパスタだった。具にはエリンギをバター醤油で炒めたものが使用されており、何ともいえない食欲をそそる香りがリビングを満たしていた。

朱里は午後に辺りを散歩してくるつもりだ、と彩乃に言った。すると、彩乃は警戒心を強めるように注意をしてくる。

「いいけど、余り遅くならないようにね。それから国道の方へは行かないこと」
「国道はダメって。どうして？」
前半は常識的であったため、首を経てに振ることに何の躊躇いもないだろう。けれど後半が納得出来ない彼女はその理由を尋ねた。
彩乃は急な質問を予期していなかったのか、言葉を詰まらせた。
「車が危ないからに決まってるでしょう？」
「そんな。信号くらい分かるって。小学生未満の子供じゃあるまいし」
朱里は心外だと言わんばかりに反論した。その反論を押え込むように、彩乃は更なる言葉を追加した。
「今の貴女はまだ心配だもの。途中でふらついたりしたらどうするの」
真剣味を帯びた言葉に、深刻そうな雰囲気が漂う。それを和らげたくて苦笑しながら朱里は言った。
「……そんなこと言ったら、どこにも行けないよ」
「だ、か、ら。国道以外をお散歩すれば良いって言ってるの」
彩乃はぴしゃりと言い放った。どうやら朱里に反論の余地は無いようだった。そして彼女は不承不承といった体で仕方なく了承した。

「うわぁ、やっぱりスカートばっか」
眼前に広がる衣服たちを目にして、朱里はげんなりとした様子で

唸った。額を右手で押さえながら天井を仰ぐ。
今現在も履いているのはスカートだった。愛華が自宅から持ってきてくれたのは、見事にスカートのみであったため、抵抗感を拭いきれずとも履くしかなかった。何かの拍子にふわりと上がりかけるスカートは、足元を不安にさせる。心許なくて落ち着かなくなるのだった。

出かける前に着替えようと思った彼女は、自室にてクローゼットを開けていた。
思った通り、そこには女性のための装いが多数仕舞われていた。
一つスカートを広げてみた。グレーの膝上十センチほどと思われる、普通のスカートだった。
ここまで大量に所有しているからには好きだったのだろう。それを見ても全く着用したい、と思わない自分を朱里は不思議に思った。しかしそれも記憶が戻るまでなのだろう。記憶が戻った暁には、これらの服たちも愛おしく思えてくるのだろう。彼女はそう思うことにした。それ以外の結論が思いつかなかった。
スカートを片付けようとして、ふと気づいた。内側に何か見える。そのままでは確認しづらいと判断して裏返しにしてみて、彼女は目を見開いた。

「へぇ」

今まで何の変哲も無いスカートが、3段のフレアスカートに変化していたのだ。
段々には控えめながらもフリルが付いていて、殊更に女性らしさを強調する。今の朱里には名称が定かではなかったが、それはリバーシブルのフレアスカートであった。素直に感心すると共に少しだけ興味が湧いた。だが所詮興味だ。着用したいとまでは思わなかっ

た。そのまま片付けた。
悪戦苦闘の末、ようやく見つけたスキニータイプのデニム柄パンツ。あまり使わなかったのだろう、綺麗に畳まれて奥の方に仕舞ってあった。

朱里は姿見の前に立った。スカートのチャックを一番下まで下ろす。それは何の抵抗も無く、すとん、と床に落ちた。
姿見へ視線を移すと、そこには下着姿のまま頬を紅潮させた、儚げな少女が映っている。早る気持ちでデニムに足を通した。動きがぎこちない。
下は着替えたが上はそのままで良いのだろうか、と彼女は疑問に思った。しかし合わせ方やコーディネートが分からなかった。迷った末そのままでいる事にした。違和感があれば彩乃が指摘してくれるのでは、という淡い期待もある。

朱里はキッチンに居る彩乃に話しかけた。
「ちょっと、出てくるね」
シンクに向かって洗い物をしていた彩乃は振り返り、少し驚いた様子でまじまじと見つめてきた。奇異なものを目にするような視線に当てられて、朱里はいたたまれない気持ちになった。

「えっと、やっぱりどこかオカシイ……？」

心の声がそのまま現実の声となった。
流行に行き遅れてそれを指摘されるような、気恥ずかしさが込み

上げる。俯いた顔が自然と上目遣いになった。

彩乃はもう一度下から上へ、朱里の全身を見回した。
下はスキニータイプのデニム。インナーには黒いクルーネックのカットソーを着ていて、アウターには薄手のベージュがかったガーディガンニットを羽織っていた。そして胸の部分をボタンで留めている。そこに女性特有の艶かしさはなかったが、丸みを帯びた身体とデニムから浮き出たくっきりとしたボディラインが、彼女を女性であると知らせる。

そして、彩乃は首を横に振った。
「ううん。全然変じゃないわ。ただ貴女がスカート以外履くの、久しぶりに見たから驚いただけ」
そう言われるのは朱里としては予想の範疇だった。誤魔化すように笑う。
「やっぱりそうだよね、はは」
「急にどうしちゃったの？」
朱里は怪訝そうな顔を向けられて、少し焦った。
「いや、えっとスカートの気分じゃなくて」
あんなクローゼットを見た後にパンツルックで現れれば、誰でも不思議に思うだろう。そのクローゼットを知っている彩乃も例外ではないはずだ。一方で合わせ方に違和感が無いというのに、朱里としては心中でそっと胸を一撫する。
「ただ……そうね」
そう言って彩乃は、少し考え込むような仕草をした。
「腕時計くらいしても良いかもね。シャープで綺麗目なのをすれば

アクセントになって、よりキュートに見えると思う」
「あー、腕時計。忘れてた」
キュートさなど求めていない、と朱里は内心で思いつつも、確かに腕時計は付けてはおらず頭にさえ全くなかった事に気づいた。事故の際に携帯電話が破損してしまっている、という話を入院中に聞いていたため、単純に時刻を知る手段としても必要だろう、と判断した。
「取って来るね」
「うん」

朱里は階段を上がり自室に入った。
クローゼット周辺を探したが腕時計が見つからない。机の奥の小物が並んでいる箇所に、腕時計を発見した。
腕に巻くバンド部分はシルバーで、文字盤には薄紫を基調とした色合いが輝いていた。目を凝らさないと分からない程度の彫りで、小さくハート型があしらわれている。非常に小さいタイプで時刻を知るため、というよりも装飾品としてのポジションが近いような、そんな印象を朱里は抱いた。

そして腕時計を嵌めて、玄関へ移動した。
「いってきまーす」
キッチンにいるであろう彩乃まで聞こえるように、朱里は少し声を張った。
すぐに、いってらっしゃい、と奥の方から彩乃の送り出す声が聞こえてきた。姿を見せないままなのは、洗い物を続けているからだろうか、と朱里は考えた。

朱里がドアを開けると、春の生暖かい風が流れ込んできた。その風に手招かれるように地面を踏みしめた。

第1話　～お着替え～（後書き）

ども。作者です。

2次元も3次元もスカートは至高だと思います。
何というか色んな夢が詰まってるんです。
このような物言いだと、男性にしか共感を得られないような気がしますが（笑）

第2話　～お散歩～

朱里は外へ出て小さな鉄扉を開けた。首を回すと、左右に道が分かれているのが分かった。

「どっちだったっけ」

この場合のどっち、とは国道ではない方のことを指した。

首を傾げて腕を組む。すぐに閃いたように顔をあげる。

「多分こっちかな」

そう言って、国道とは反対方向の左側へと行き先を定めて、足を動かした。

どうやら私は道を覚えるのはそう得意ではないらしい、と朱里は思った。

朱里にはこれといった明確な目的地が無かった。そもそも地理も分からず、一帯の地名もあやふやだった。だからこそこうして、実際に歩いてみて早く街の中を把握したかったのだ。

そうしてふらふら、と気の向くままに周りを眺めながら歩いた。先ほど、彼女は地理の弱さを自覚したばかりだったが、何となく見覚えのある景色を辿れば帰れるだろう、という楽観的思考の下足を動かした。

五分くらいは歩いただろうか。辺りには似たような軒並みが揃っていて、未だに住宅地を窺わせる雰囲気のままであった。

と、そこで少し景色に変化がみられた。

彼女から向かって右側に公園があった。

ブランコ、ジャングルジム、シーソー、鉄棒、砂場等、定番といえる児童向け遊具が設置されていた。小さ過ぎるわけでもなく、かといって園内での移動が大変という規模でもなく、おおよそ中規模といったところだろうか。鉄製の遊具には所々錆びれがみられ、近年に出来た公園ではないことを知らせる。

朱里は公園内に足を踏み入れた。ブランコへと一直線に進む。両脇の鎖に捕まりながら、椅子に座った。浅く呼吸をしながら園内を見つめる。

そして考えた。自分は昔、ここで遊んでいたのだろうか、と。愛華と一緒に砂場を駆け回り服を汚しては、その度に母に叱られていたのだろうか。

そうして在りもしない自身の軌跡を夢想する。

彼女はそっと地を蹴った。ゆらり、と僅かにブランコが揺れた。しかしそれ以上の力は加えず、小さな揺れはすぐに収束へと向かった。

鞦韆（ふらここ）と揺れて、長い髪もそれに半瞬遅れて付いていく。ざわめく、ゆらめく。波々と。

やがて彼女は立ち上がった。次の場所へと移動するためだ。数々の遊具を振り返りながら公園を後にした。

道を覚えやすいように、彼女はなるべく方向を変えずに進んだ。大きな路地を真っ直ぐ突き進む。
次に姿を現したのは商店街だった。駅のある国道側を避けて歩いたため、隣駅に近い商店街のようだった。その駅も利用者が多くないためか、商店街自体もあまり大きくないようである。
彼女は左右を見渡しながら歩いた。こんなお店があるんだ、とその程度の感想だった。
ゲームセンターが見えた。朱里は入り口から中へと視線を移してみると、ＵＦＯキャッチャーが見えた。中に入ってからクレーンが吊るされているボックス内を見てみた。
カラフルなクッションや、形容しがたい生物の人形、実用的なＵＳＢ搭載の備品等、様々な景品が人為的な匂いで配置されていた。思わず食指が動く。
その時、朱里の脳裏に母のうんざりとした声がリフレインしてきた。かき消すように首を振って再び歩き出そうとした。

「ねぇ」
朱里は声を掛けられた。まさか自分に向けられた言葉とは思わず、反応を示さなかった。
朱里の視界に若干影が落ちる。不審に思い顔を上げると見知らぬ男性が、彼女の前に立ちはだかっていた。

二人組みの男だった。
一人は黒い短髪で髪を逆立てている。私服を着ているが高校生くらいの年恰好であった。

もう一人は金髪の緩いパーマをかけている、一人目と同じの年に見えた。学校の同級生同士、というのが一番しっくりくる関係に見える。

「ねぇ、シカトとか酷いんじゃねーの？」
にやにやとした嫌らしい顔を向けて、男は言った。
「……何ですか？」
声を掛けられる理由など無かった朱里は、警戒心を隠そうともせず身を固くして返事をした。

「おい止めろよ、どうせお嬢様だろ。俺らなんて眼中にないんだよ」
金髪の男が言った。
「あぁそっか。身分が違いすぎて、下々の奴らなんかは見えなくなるんだなきっと」
二人は向かい合ってげらげらと、下品な笑い声をあげた。
自分たちから声を掛けたのにも関わらず、朱里など居ないかのように話を進める二人に彼女は腹が立った。

「別にお嬢様なんかじゃ」
彼女は語気鋭く言い返した。
「へぇ。じゃあさ。俺らと遊ぼうよ」
「そうそう。ＵＦＯキャッチャー見てたじゃん。興味あんでしょ？」

じゃあさ、の意味が朱里には分からなかった。支離滅裂もいいところだ。繋がらない文脈に、どう返せばいいのか付いていけない。
「ちょっと。ちょっと……見てただけです。興味なんかありません」
苦しい言い訳だったが、とにかくこの場から早く立ち去りたかった。ボックス内を凝視しておいて、興味が無いなどとまるで寝言の類だった。やはりというべきか、それでも彼らは引き下がらなかった。
「少しくらい良いじゃん」
「どいてください。もう行きますから」

朱里は強行突破しようと思った。ここに留まって良い事など一つもない。
くちゃくちゃと、音を立てながらガムを噛んでいる短髪の男に、生理的な嫌悪感を感じながらもどう動こうか、と思案する。
入り口は非常に狭く、開店中は自動ドアも閉まらないようになっているようだった。狭い故に二人が並ぶだけで、入り口は塞がっている状態になる。しかし、その二人の間にはほんの僅かな隙間があり、自分の体格ならばその間をすり抜けられるのでは、と思った。
更に彼女は辺りを観察した。首は動かさずに目だけで辺りを窺う。他に客はいないようで、店員らしき人も見当たらなかった。

「俺らＵＦＯキャッチャーすげー上手いんだよね」
「マジでプロ級だから」

彼女は返事をしなかった。聞き流しながら動くタイミングを計る。

ここだ、と思った瞬間に朱里は足を前に出した。隙間をめがけて駆ける。

「あ、こいつ！」

短髪が唾を飛ばしながら、眉を上げた。

朱里は風を切るような感覚に包まれながら、成功する予感を握り締めた。しかし、そこまでだった。

不意にぐらり、と身体が覚束なくなる。三半規管が麻痺したかのように方向感覚が分からなくなって、足の自由が利かなくなった。加速していた身体はすぐには止まれない。慣性の法則に従ってバランスを崩し始めた。

しまった、と思った時には金髪の男に体当たりするような姿勢でぶつかっていた。

彼女はぶつかった衝撃と反動で後ろに倒れ、尻餅を付いた。なにか物が落ちたような鈍い音がする。カーディガンが床に触れてしまった。

「いっ」

すぐにじんじんとした痛みがお尻から這い上がってくるのを、朱里は感じた。

痛みに呻きながら見上げると、金髪の男が頭を押さえていた。どうやら体重差もあり倒れこそしなかったが、ふらついた拍子で自動ドアに頭をぶつけたようだった。

「てめぇ、やってくれんじゃんよ」
二人の男は怒りに顔を赤くしていた。特に被害を被った金髪の男は、今にも飛び掛ってきそうな勢いで息巻いていた。
じわりじわり、と近づいてくる。シューズが床を擦る、耳障りな音が響く。
近づく度に朱里の顔が陰影で覆われていった。それは最初に声を掛けられた場面と重なるが、また違った意味を孕んでいた。

途中でふらついたりしたらどうするの――
朱里は母の言葉を思い出した。万全でない自身の体調を呪った。

金髪の男が朱里の腕を掴む。勢いだけに任せて、尻餅状態だった彼女を無理矢理に立ち上がらせた。長い髪が揺れる
「い、痛っ！」
とても強い力だった。朱里の骨は悲鳴をあげる。
掴むのと平行して、彼は訳の分からない罵詈雑言を喚き散らした。音割れしそうなボリュームに、何を言っているのか朱里は正確に聴き取れなかった。浴びせられる汚い言葉と明確に向けられた悪意に、本能的な恐怖を感じて身を竦ませた。
容赦なんて全く無かった。これが男の力なんだ、と初めて男性が恐怖の対象に見えた。

「は、離してよ」
朱里は震える心を摩りながらも何とか声を絞り出す。
「はぁ？　まずは謝罪だろうがよ」
金髪の男は、ぎらついた目で朱里を見下ろしながら言った。その

目はどんな言い訳も受け入れない、という目をしていた。
「そんなの……だってあなた達が」
「おい、それよりさ」
短髪の男が朱里の言葉を遮った。その声に、金髪の男は視線だけを寄越す。そして短髪の男が続けた。
「トイレに連れ込んじまおうぜ」
「お、それいいな」
その言葉の意味を正しく理解し、金髪の男は唇の端を上げた。

「それってどういう……」
朱里は言葉の意味を咀嚼しようとしたが、痛む腕がそれを邪魔する。
ここのゲームセンターのトイレは一つだけだった。男女兼用となっていて、スペースとしては広めに作られていた。以前より、客からトイレを男女別に増設するように、と要望が相次いでいることで有名だった。そしてそれはまだ果たされていない。

朱里は想像した。連れ込まれたトイレの個室で二人から殴る蹴るといった、嵐のような暴行を受けるのだ。寿命が縮まるようなバイオレンスな映像が現実味を帯びて迫ってくる。
これから自分に降り注ぐだろう受難を思って、心が縮こまる思いがした。果たしてそれは、男達が想像する内容と一致していたのか。
強がりを見せていた朱里だったが、徐々に心の防壁にひびが入り始めた。膨らむ恐怖感は本人の意思を無視して、涙腺を刺激する。

「そそる顔すんなぁ」
泣き出しそうに黙り込んだ朱里をみて、短髪の男は満足そうな声を出した。
いつだって強者は高圧的な言動で弱者の心を鷲掴みにして支配し、弱者もまた、それを強制的に享受させられる。そして、その様を確認してはまた、強者は愉悦に浸ってほくそ笑むのだ。

と、そこで何かが放物線を描くのを朱里はみた。
それはゆっくりと弧を描きながら宙を舞い、金髪の男の後頭部へと直撃した。
こん、と乾いた音がしてそれは転がった。飲み干されて中身が無くなった、赤いラベルの空き缶だった。

男が振り返ると、そこには制服を着た少年が投球フォームのまま固まっていた。
同時に、朱里は掴まれていた腕が軽くなるのを感じる。
「あ。やべ、やっちまった」
しまった、と失敗を悔いるような声で、少年は言った。

第2話　～お散歩～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読みいただき、ありがとうございます！

ユーザー登録して1ヶ月ちょい経ちましが、お気に入り登録してくださる方が徐々に増えてきて嬉しい限りです。
これからもよろしくお願いします。

公園に出て来た『鞦韆』はブランコの昔の読み方です。
「しゅうぜん」「しゅうせん」と読んだりもするようです。ここでは擬音に近いニュアンスで「ふらここ」と使ってみました。

次回は少年が大活躍……！？笑

第3話　～友達～

「あ？　てめぇ何のつもりだよ」
金髪の男は、短時間に二回も連続で打ちつけた後頭部を撫でながら威嚇の声をあげる。それは泣きっ面に蜂というべきか、いや、自業自得が正しいのだろう。
「あ、いや、当てるつもりは……」
凄まれて少年は後ずさる。そして慌てたように手の平を横に振った。取り繕うように苦笑い、弁解を始める。

朱里は少年を見つめた。当然、初めて目にする顔だった。
美形、というわけではないが整った顔立ちに部類される方だった。ショートミディアムの髪にダークブラウンのカラーリングがされていた。あまり分け目がなく無造作に前髪が散らされている。毛先にはセミハードワックスによる軽い束感があり、それが爽やかな印象を与えた。

「分かってんだろうな」
金髪の男が一歩踏み込んだ。どつかれて少年は後ろによろめく。
「うわ、と。マジか、これ……」
俺ケンカなんかしたことないのに、と彼は小さく呟いた。滲んだ冷や汗がつつと、少年の頬を伝う。引きつった顔をして手の甲でぬぐった。
唐突な襲撃に、男たちの意識は完全に少年へと移ったようだった。

朱里のことなど見向きもしない。

どうしよう、と朱里は男たちの背を見つめながら思った。それと同時に思考が混乱し始める。現状と原因と対策が頭の中で混線して、うまく考えられない。

何故このような状況になっているのだろうか。朱里を助けようとしているようにも思えたが、今の切羽詰った様子の少年を見る限り、偶然の出来事であるらしかった。

朱里はあたふたと現状を見守ることしか出来ない。

「仕方ないなぁ」

少年はちら、と朱里を横目で見やる。一瞬だったが二人の視線が交わる。

その視線を受けて彼女は、彼が何か伝えようとしているのだと直感した。けれど、それが何かまでは分からなかった。もう一度こちらを見てはもらえないだろうか、という希望と共に祈るように少年を見つめるが、その顔はもう朱里を見ていなかった。

「相手するからさ。付いて来なよ」

そう言うと、少年は二人の男に背を向けて急に走り出した。

「あ、待てよごらぁ」

「クソッ」

突然の挙動に、男たちは咄嗟な反応が出来ない。そして思い出したように追いかけ始める。

そこへ一人、中学生と思われる細身な少年が入店しようとしていた。男達は彼を押しのけて店の外へと出て行った。

彼は肩をぶつけられバランスを崩したが、ややあって立て直し、

呆然としている朱里と出口を何度も見比べていた。

台風が過ぎ去った後に一人、ぽつんと取り残される朱里。騒がしいはずの店内は彼女の周りだけ、時が止まったような静けさが降りていた。

ふらふらと、休憩用の椅子に倒れこむ勢いで座った。

話の早い紙芝居のようなめまぐるしい展開は、彼女の脳へ整理する時間を要求していた。肩を落として床を見つめる。

どれくらい経ったのか。五分か六百秒か、あるいは一刻かもしれない。

はっと我に返った彼女は、初めて自分が泣いていたのだと気づいて、指で涙をぬぐった。疲れた心で何気なく腕に目を遣ると、掴まれた圧力で皮膚が赤黒く変色していた。

そこでようやく頭が回り始めた。めぐる血液が脳を活性化させる。

「そうだ、あの人……」

朱里は口元を手で覆いながら少年の顔を思い浮かべた。

意図的にしろ偶然にしろ、結果的に彼女は少年に助けられたのだ。その彼について、身を案じるのは当然のことだった。

「確か『相手してやる』って」

すると、今頃は人気の無い路地で格闘しているのだろうか、と朱里は考えた。

彼は喧嘩に特別長けているようには見えなかった。身長はあったが、そこまで引き締まった身体という印象は無い。それだけで判断するわけではないが、相手は複数でもあり、やはり不安の方が勝ってしまう。
追いかけて、助けにいかなければと思った。あのままでは朱里は何らかの被害を受けていたに違いない。その窮地を救ってくれたのだ。

でも、と朱里は呟いた。彼女の脳裏に狡猾そうな笑みを浮かべた二人の男が映る。
その映像は彼女の腰を椅子へと縛り付けるには、十分な効力を持っていた。そしてその反面、行かなければという使命感にも似た想いと恐怖に震える足。
朱里はジレンマに囲まれながら、彼女の視界の端に中学生らしき少年が目に入った。それを見て何か閃いたように顔を上げ、彼女は立ち上がった。

「あのっ」
少年に近づいた彼女は、緊張しながらもしっかりとした声を出した。
「な、何？」
突然の接触に彼は狼狽した。先程の予期せぬ災難がまだ心に引っかかっているかもしれなかった。
「あの……この辺りに交番はありませんか？」

「交番？」
思いがけない単語が出てきて、彼は眉をひそめて聞き返した。その目はきちんとした理由を知りたがっているように見える。朱里はその目に応えようと更なる言葉を添えた。
「はい。不良グループの喧嘩を止めたいんです」
「喧嘩って」と言った彼は思い出すように、「あぁさっきの」と続けた。
彼の言葉の端々には、朱里の事を同学年だと思っている節があった。彼女としてはそんなことを気にしている場合ではなかった。この駅周辺の地理が分からない彼女は、焦る気持ちで答えを待った。
「交番なら」何かに気づいたように息を呑んで、一度区切った。「出てすぐの交差点にある」
少年は簡潔にいう。照れを隠すようなそっけなさだった。
「ありがとうございます」
朱里は早口でお礼を言い終えてすぐにお店を出た。

彼女は腕時計に目を落とした。午後四時を回ったところだった。
辺りを見渡して確認した。確かにこの商店街の出口より奥には、交差点が見える。ここからでは交番は見えないが、通りまで出れば確認できるだろうと思い、商店街の出口付近を目指した。
交差点に出ると交番が見えた。十字路の角にぽつんと、頼りなさげに建っている。
横断歩道で待たされた。今は自動車が優先されるべき瞬間である。じれったい気持ちを抑えながら、まだかまだか、と信号が変わるのを待った。

ようやく着いた交番には一人の警察官が居た。その公務員は恰幅がよく、縁なしの丸い眼鏡がより一層、球体を想像させた。
彼は朱里に気づくと、ノートパソコンから顔を上げる。
「す、すみません」
「はい。どうしましたか？」
「えと、あのお願いがあるのですが……」
彼は面倒くさそうな表情をしながら、用件を聞いてきた。それを見てあまり期待できないな、と朱里は思ったが素直に事情を話してみる。

「なるほど。それは怪我でもしたら大変だ」
全く差し迫った様子を見せずに、事情を聴いた警察官はいった。内心では面倒事に関わりたくないのだろう。
「ですから、今すぐ向かって欲しいんです」
その飄々とした言い方に朱里は苛立ちを覚えた。市民を守るのが仕事だろう、と思った。
「それで何処へ向かえばいいんだい？」
「すぐそこの商店街の……」
警察官は曖昧な言葉尻を拾い上げて、それを繰り返す。早く言えと顔に書いてある。
「商店街の？」
「商店街の……」
朱里は間の抜けている自分を殴りたくなった。助けを求めることばかりに気がいって、肝心の何処へ向かっていったのかが分からなかった。

一つ息を吐いて「場所が分からないんじゃあ」と、小太りの彼は大げさに肩を竦める。
「で、でも。あの商店街周辺に間違いないと思います。簡単な見回りでもいいので、お願いします」
朱里は必死に頭を下げた。真剣な表情で見つめる。交番の外では、小学生二人がはしゃぎながら通り過ぎていった。
懸命に頼み込む彼女を可哀想に思ったのか、彼は「しょうがない」と小さく呟いて席を立った。その時だった。

「何してるの？」
少し大きめの声だった。朱里が振り返って交番の入り口を見遣ると、「あっ」と小さく声が漏れた。
そこには先程の朱里を助けてくれた少年が、暢気そうな目をくりくりさせて立っていた。
件（くだん）の少年は朱里が交番にいることを不思議に思っているようだった。その考えはお互い様で、朱里も一緒だった。珍しいのか、彼は奇異な目で交番内へ視線を這わせる。
朱里はようやく出会えた音信不通の肉親を見つけたように、目を丸くして慌てて駆け寄った。

「藤宮さんって不良少女？」
「へ？」
彼と対峙して、放たれた第一声は朱里の理解を超えていた。思わず素っ頓狂な声が漏れた。

「え、いや、あの」
意味が分からず朱里は返答に困った。
「あ、ごめん。意味分かんないよな」
朱里は首を縦に振った。小さく笑って、少年は次の言葉を紡ぐ。
「藤宮さんは事故で入院してる、って担任から聴いてた。だから今日も当然学校は欠席してるみたいだった。んで、学校帰りにゲーセン寄ったら、入院してるはずの藤宮さんが居てさ」
最早、話の輪に入っていけずにぼうっと突っ立っている警察官は、居心地が悪そうに二人を眺めていた。
「だから。治ったはいいけど、学校が嫌な藤宮さんはサボってゲーセンだったんだ、っていう」
酷い言われようだ、と思った。その思いが顔に出たのか、朱里は複雑な表情になる。
言い終わった彼は、一人勝手に納得したようなすっきりした笑顔を見せた。
何から聞けばいいのか、何から話せばいいのか分からない朱里は沈黙した。気詰まりな雰囲気が流れる。
そこで痺れを切らした警察官が「用が無いなら出てってくれ」と、二人を追い出し始めた。
交番の外で二人は肩を並べた。

気を取り直した朱里は、順番に解決を試みる。
「まず誤解して欲しくないのは、サボりじゃないです」
「ふーん」
「退院はしたけど少し様子見で……さっきは散歩してただけで」
好調だったのは最初の否定語までだった。次に続いた説明は単語が断片的すぎて、あまり説明になっていなかった。彼女は説明下手

を痛感していた。言葉少なで、意味が伝わっているのか怪しかった。いや、恐らく正しく伝わっていないだろう。
順を追って説明するには事故について話さなければならず、言いがかりを付けてきた二人組みの男についても話さなければならず、その前に少年についても聞かなければ、とも思い段々と思考の糸が絡まっていく。最初の誤解さえ解ければ、と朱里は説明を諦めた。次の言葉を探す。

朱里はすっ、と深呼吸した。肺が酸素で満たされる。少し強めの深呼吸により、横隔膜は肺を押し上げて胸を膨らませた。吐き出すと同時に弛緩した横隔膜は胸部を縮めた。
「それより、えっと」
身長差で見上げなければならない朱里は、そこで首を下げた。重々しく口を開く。
「私のこと……知っているんですか？」
え、と彼は小さく唇を開いた。驚いている様子だった。
それを見て朱里の心は沈む。知り合い然として接してくる彼に、『俺の事を忘れたのか』と詰め寄られると思ったからだった。しかし、その予想はあっさりと裏切られる。

「……ごめん」
自嘲気味に彼は小さく微笑んだ。
「俺の事なんて知らないよな」
「え？」
彼は背を向けて一歩前へ踏み出た。朱里の視界には彼の背が映る。
「同じクラスにもなったことないし、喋ったこともないんだから当然といえば当然で」

方向を変えて彼は朱里へ向き直った。その表情は悲しそうに唇を結んでいた。
彼が告白した内容。つまりそれは――同じ学校に通っていながらも、お互い話をしたことが無い間柄、という事実。つまるところ、見知らぬ他人同士。

「でも」と、朱里の思考を遮るように、彼は続けた。
「校内ではよく見かけた。藤宮さん結構目立つし、ウチらの学年じゃ有名人だから」
「有名人って」
朱里は同じ言葉を繰り返した。何故有名人なのか彼女は頭の隅で考えてみる。一つだけ思い当たったことがあった。けれどそれは単なる自惚れなのではないか、と思い直す。
「そうそう。この四月から初めて同じクラスなんだけどね」
辺りはいつの間にか茜色に染まっていた。西日が世界の色を変える。瞳に痛々しく映える空色は意味もなく哀愁を誘うようだった。
「だから、タメ語でいいんだよ」
その言葉で、朱里は初めて彼に対して丁寧語で接していたことに気づいた。知らない人に対しては無意識で行っていた。
「別に敬語なんて使ってなかったよ」そっぽを向きながら朱里はいった。自然と唇が窄(すぼ)まった。
「そっか」無かったことにしようとした朱里が可笑しかったのか、彼は鼻で笑った。
笑われたというのに不思議と悪い気はしなかった。沈んでいた朱里の心は浮き輪が掛けられたように、ぷくぷくと徐々に浮き足だってきた。

二人は並んで商店街へと、来た道を戻る。
不良の高校生二人からは逃げ切り少年は無傷で済んだ、という話を朱里は聞いた。振り切った帰り道、見回りの強化を提案しようと、交番へ向かったという。それを聞いて朱里は彼の無事を喜んだ。胸のつっかえが取れた気がした。
「良かった。私のせいで怪我でもしたらどうしようかと思ったんだ」
「これが漫画とかだったら、その場で返り討ちにしたんだろうけどなあ」
少年は気にするな、とでも言うように皮肉で返した。その言葉に朱里は、彼の飾らない誠実さを垣間見た気がした。
「そこでケンカしてたらお店にも迷惑掛かってただろうから、それで良かったんだよ、きっと」
「うん。そうだよな」
朱里のフォローに納得した様子で彼は頷いた。
「空き缶を当てたのはわざと？」
「いや、偶然」
少年はかぶりを振った。
「でも絡まれてるのは分かった。空き缶が床に落ちる音で俺に気が向いてくれれば、って思って投げたけど何故か当たっちゃって。そしたら、すげー勢いでこっち来るんだもんな。最初っから逃げるつもりだったけど、あいつら手出すの早すぎるって。あん時は焦った」
その時の状況を思い出したのか、少年の顔の筋肉がわずかばかり強張っているように見えた。二人は横断歩道へと差し掛かる。歩行者用の信号は青を示していた。

「ね。聞いてもいい？」
「何でも」

横断歩道を渡りながら朱里は少年の横顔を見た。クラスメイトだ、ということを聞いたからだろうか。彼と接する際に何の気負いもなく、朱里は自然に話しかけることが出来た。まるで男友達のような気楽さがそこにはあった。

「名前。教えて欲しい」

彼は歩みを止めて数秒固まった。そしてすぐに、おおう、と頭を抱えた。

「うわぁ、大事なこと忘れてた」

しかしすぐに持ち直して、歩みを再開させる。落ち込むような表情のまま、彼は立ち止まった場所が横断歩道のど真ん中だ、ということに気づいたのだろう。

「あ、でもさ、もうすぐ学校に出るんだろ？」

「え、うん。多分来週くらいには出れると思う」

横断歩道を渡り終え、その先に商店街の入り口が見えた。

「じゃあ、そん時で」

朱里は目を瞬かせた。

「どうして？」

「謎めいてた方が何かカッコ良くない？」

「そ、だね」

疑問文を疑問文で返す人に対してはどのような返答が正解なのか。深く掘り下げるのが煩わしくなった朱里は、同意のみで返答を寄越す。すると慌てたように少年は訂正を口にした。

「あ、いやいや、やっぱ聞いて。まさか流されるとは思わなかった……」

一瞬の間。肌寒い風が弱々しく吹いた。春とはいえ夕方には気温も下がり気味のようだった。

「鳴海……鳴海奏太（なるみそうた）」

名乗ってから、彼は自身の髪をくしゃ、と右手で撫で付けた。

「よろしく、鳴海君。お店では助かった。ありがとう」

精緻なドールを思わせる彼女はそれとは不釣合いに、ほころぶようなにっこりとした笑顔でいった。精一杯の感謝の気持ちを表したつもりだった。

それを見た奏太は不意を付かれたように瞳孔が開かせた。そして頬にうっすらと朱が差さり始めたかと思うと、視線をあさっての方向へと逸らした。

彼女に初めて友達と呼べる人が出来た瞬間だった。

彼は初めて何かを自覚した瞬間だった。

第3話　～友達～（後書き）

ども。作者です。

奏太にバズーカ砲でも取り付けて、
不良どもを一掃させとけば話は早かったのですが、
そんな同級生は嫌なので止めました。

第4話　～疑念～

―1―

三月三日（月）：今日は祝日だよ。やっほーい！　そんなわけで愛華と渋谷でお買い物なのです。特に欲しいものはないけど、見てるだけで楽しいんだから買い物って不思議だよね（笑）ってそのつもりだったのに、結局2着も買っちゃって。。

不満があるとすれば、店員さんが粘着質っぽかったことかなぁ。愛華と適当に回りながら見たいのにさ、くっついて離れないんだよねぇ……。あそこはもう行くやめよっかなー面倒くさいし！　でもでも可愛いコ（服）をお迎えできて良かったッ

三月四日（火）：学校始まっちゃったよ（汗　どうしてこうも週明けはダルイんだろね。週明けが火曜にずれ込んでもダルイんだから、これが金曜までずれ込んでもきっとダルさは変わらないんだろうなー。

そして今日は消しゴムを忘れてしまった。多分、昨日宿題をした時にペンケースに仕舞い忘れたんだよね。これはアレだね。わたしに宿題・勉強をするな、っていう神様のお告げに違いない！　よし。もうこの先宿題はやらないことにした。陽菜ちゃんに写してもらおうーっと（笑

―2―

朱里と奏太は商店街のゲームセンターで別れた。二人が出会った場所だ。また学校で、と再会を約束する言葉で挨拶を交わし、それぞれの家路に着いた。
彼女は迷うことなく家へと帰宅することが出来た。途中で別の道へも進みそうになったが、朧げで曖昧で頼りない記憶が、辛うじてそれを押し留めてくれたのだった。活気のない商店街を突き進み、誰も居ないままの公園の横を通り過ぎ、見慣れつつある住宅街へ戻ってきた。

午後六時頃だった。暮れる夕日が沈みきり、暗闇が降りつつある玄関を覆う時分、愛華が学校から帰宅した。
朱里を見つけた彼女はまるで自分の事のように退院を喜んだ。細い廊下をひとしきり騒がせた後、彼女は言った。
「あっ、そうだ。ほら、あれあれ」何かを思い出そうとするみたいに、彼女の人差し指がくるくると宙を舞った。
「あれ？」
「確か日記付けてたよね？　読み返してみたらどうかな」
「そ、そんなのあったんだ」
まるで寝耳に水のような事実を知った。朱里は自身の意外な趣味に驚く。
「うん。毎日書いてたと思うよ」
「そうなんだ……。うん、ちょっと見てみる。なんか恥ずかしいけど」そういって朱里は照れた笑顔をみせた。
日記というものは基本的に書く本人しか、その存在が知られていない場合も多い。その存在を他人の指摘で知るというのは、考えてみればひどく間抜けな会話だったのかもしれない。彼女は、早速そ

の足で自室へと向かうために、階段を上がった。

部屋のドアを開くと、廊下の照明がどんよりと暗い部屋を僅かに照らした。部屋の電気を付けると、不完全だった部屋の明度は完全なものへと変化した。

朱里は本棚から一冊の冊子を手に取った。それはコミックが詰め込まれた列にある、一つだけ異質な本。それだけが背表紙に何も書かれていない。

「ふぅ」朱里は読み終えた冊子を閉じた。溜息に混じってパタン、と閉じる音がした。閉じた反動で風力が発生したが、それは彼女の髪を揺らすまでには届かない。

それを読んだ朱里は、全く知らない一人の女性の生活の一部を覗き見たようで、後味が悪いと感じた。

読む前の、もしかしたら何か分かるかもしれない、という淡い期待はものの見事に裏切られたことになる。

その冊子はオレンジに彩色されていて、白の水玉模様がアクセントを残すダイアリーだった。全ページに渡って縦型に丸くパンチがされていて、空いた空洞に金のリングが装飾されている。

たった今、一通り目を通した日記を朱里は手に取って、改めて眺

める。Ｂ６サイズほどの小さなタイプなのに、それは意外にもずっしりとした重さを伝えてくる。その中には見た目以上の想いと文字が詰まっているのだと、アピールしてくるかのようだった。

一部の生活パターン、考え方や行動が記されたこの日記は、朱里にそれらの情報をもたらした。しかし、日記を読み進めていく内にこれは、『思い出そうする行為』ではなく、単に『朱里をコピーしようとしている行為』なのではないか、という疑念が沸いた。その考えは今の『朱里』と事故前の『朱里』は全くの別人であるかのような考え方だった。一度浮き出たそれは頭から離れない。『朱里』を知れば知るほどに、今の自分とはかけ離れた現実に彼女は気づいた。

見知らぬ他人を助ける勇気を。
はっとさせるほどに愛らしい、人々を惹きつける容姿を。
姉妹で無邪気に買い物を楽しむ姿を。
確信犯的な勢いで学校の課題を疎かにすることを。
彼女は何一つ実感出来なかった。

その現実は自分のことを『朱里ではないのだ』と、有無を言わさずに突きつけてくるようだった。
それを認識したとたん、彼女は鈍い違和感を感じた。とくん、と胸が一際大きく跳ねるような感覚。

鈍い違和感は両脇に置いて、彼女は思考を続けた。しかし、考えれば考えるほど、答えのない迷宮に足を踏み入れたかのような終わりのない思考回路が、首をもたげてくる。そのループはエラーを起したプログラムのように、絶えず実行し続ける。解の見出せない思考は脳髄を突いて刺激し、べとべととした嫌な発汗を促す。

「はぁっ」

過呼吸のような音を鳴らして、朱里は左手で胸を押さえると、膝ががくりと崩れた。彼女の視界に、急加速で机が顔に迫ってくるさまが映る。それに合わせて重力に沿っていく身体を、間一髪右手で机を支えて受け止めると、その拍子に冊子が床に転がる。ぱさりと音がして、冊子は見開き一杯に横たわった。

荒い呼吸を整える朱里の瞳は、落ちた冊子も拾わずに床を一点に見つめていた。ただ、たまたまそこに目の位置が来たからその床を見ていただけ、というように実際は何も見てはいなかった。

突き上がる衝動は止まらない。それは不安という名の情。それは朱里の内面から喉元へ、何度も猛進するように攻撃を繰り返した。

耐え切れず、朱里は片手で頭を抱えるようにして、慟哭にも似た声を喉元から絞り出す。そしてついに彼女は部屋を飛び出した。

ドタドタと周囲を気に留めない足運びで階段を降り、サンダルを引っ掛けて玄関に立った。その騒音を聞きつけた愛華が、慌てた様子で玄関へ駆け寄った。

「お、お姉ちゃんどこ行くの？」
愛華の問う声と朱里が外へ出て行くのは、ほぼ同時だった。

朱里は薄っすらとした外灯を頼りに、とぼとぼとした足取りで歩いていた。彼女は家を飛び出した後、当てどもなく出鱈目に息を切らせて走り、見知らぬ道に出たところで足を止めたのだった。彼女は現在、家からどの程度離れた場所なのか、自分がどこにいるのかも分からない状態だった。
「何してんだろ」
彼女は暗い空にぽつり囁くようにいった。空は曇りに覆われて、星はその煌びやかな姿を勿体つけるかのように隠している。
先ほどの壊れそうに軋んだ胸の動悸は、いくぶん収まっていた。爆発しそうな焦燥感は矛先を求めて体中を暴れていたが、それは夜の街を駆け回ることの疲労感によって紛れさせることが出来た。けれどそれは根本的な解決になっていない。そもそも何が問題なのかすら、彼女は正しく認識出来ていなかった。

彼女は道に迷っていた。覚えのない道をただただ、何も考えずに走ったのだから当然の結果だった。細い路地はどこを通っても似たような風景ばかりが広がり、それは先ほども一度通ったのではないか、という既視感を漂わせる。
「こっち、かな？」
先の見通せない暗い路地に足を踏み入れた。その表情はおどおどとした雰囲気が窺える。
「いや、やっぱり」と、いくつかの分かれ道を右往左往しては、進

むべき道を決めかねていた。
誰か地元の人でも通りかからないか、と彼女は藁にもすがる思いで、辺りを見渡すために後ろを振り返る。すると、朱里の眼前に何かが迫り、反射的に動きが止まった。

「おっと」
男性の声がした。
あ、と朱里の視界に広がるのは人間の体なのだと気づいて、彼女は一歩足を引いた。
「いきなり立ち止まって振り返っちゃいけない」
朱里の鼻先にぶつかりそうになったのは、四十代と思われる男性の胸だった。どうやらサラリーマンのようだ、と彼女は推測した。紺のスーツと白のワイシャツを着込み、緩んだネクタイをしていたためだ。ワイシャツが第二ボタンまで外れているのをみると、おそらく会社からの帰路なのだろう。訝しげな表情で朱里を見ている。
「ご、ごめんなさい」朱里は申し訳なさそうに、頭を下げる。その一方で幸運だ、とも思った。彼女は現在進行形で迷子である。
まぁいいか、と一瞥をくれてから立ち去ろうとするサラリーマンに、朱里は引き止めの言葉を掛けた。
「え？　何？」
「だから、あの、道に迷ってしまって」
語尾に差し掛かる頃にはしぼんでしまって、朱里の声は聴き取りにくかった。それでも彼は半信半疑のように「迷子？」と聞き返した。
「はい」
正直に答えた彼女は、彼から嘗めるような視線を受けて、逃げるようにうなだれた。朱里からは、よもやこの歳になって迷子とは、

という視線にみえて恥ずかしくなった。
観察し終わった彼は、「どこの駅に行きたいの？」と意外な言葉を口にした。朱里としては面倒に関わるのはごめんだ、とばかりに逃げられると思っていたのだ。彼女は自然と笑顔になっていく。

「後はこの道を真っ直ぐ行けば、大通りに出るから」
道案内をしてくれる、というサラリーマンに朱里は最寄駅をいった。それに加えて、そこから国道のある大通りに向かいたい、という旨も添えた。すると彼は駅まで道を案内してくれたのだった。現在は駅から歩いている途中である。
細い路地にいる二人からは、奥の方にいくつかの信号と様々な車が通るのが見えた。それは彼の言が正しいことを教えてくれる。

「ありがとうございます。ここまでくれば後は分かります」
朱里は深く腰を折って礼の言葉を述べた。きめ細やかな長い髪がそれに合わせて踊る。

「いや、当たり前のことだよ」彼は謙虚にいって、「それに」と朱里を見て続けた。
「私にもね、君くらいの娘がいるんだ」
「そう……なんですか」
あぁ、といってから彼は寂しそうに目を伏せた。
「でも、最近は相手にしてくれなくてね。話しかけても無視だよ。

きっと家にお金さえ入れとけば、後は用がないんだ」
「そんな」
悲壮感を漂わせて悲しい言葉を吐く彼に、朱里は困惑した。吐き捨てられた言葉はどこまでも濁った色をしていた。朱里は遠くから車の走行する音を聴いた。
「ケンカでもしたんですか？」
「いいや」
「だったら」そこまでいったところで、やっと彼は伏せていた目を上げた。朱里と視線がぶつかった。「きっと今だけですよ」
それはきっと、思春期特有の感情だ。たいした理由もなく親と話したくなくなる。自分のしていることを見られたくない、知られたくない。友達と親を会わせたくない。それら全てに言いようのない照れ臭さが立ち昇ってきて、それを切り裂くようにシャットダウンしたいのだ。

「そうかな」
「そうですよ。娘さんが今おいくつかは分かりませんけど、きっと大学受験をする頃には普通に接してくれます」
朱里は励ますように微笑んだ。
「だといいな」そういって彼も笑窪を見せると、顔の表面が歳相応の皺に塗れた。それを見た朱里は上手くいくといいな、と思った。
「でも……大学受験ということは後五年くらいは我慢の時ということか」
「え？　五年って」
「だって、君、今は中学一年くらいだろう？」
朱里は耳を疑い、目を丸くして、息を呑んだ。そしてすぐに顔を赤らめた。
『私にもね、君くらいの娘がいるんだ』朱里はこの言葉で、彼の

娘は高校生だと思っていた。つまり自分は――

面倒に感じた彼女は、自身の年齢を訂正しなかった。したところでさしたる支障はあるまい、と判断した。

道案内をしてくれた心優しい彼に分かれを告げ、改めて帰路に着こうと朱里は前を見据える。彼女の前方には広大な道路が寝そべっている。

記憶を探ってみると、確かに朝はここを通って家まで歩いたのだと朱里は思い出した。点滅する歩行者用の青信号に焦りながら、横断歩道を渡る。渡りきった瞬間に信号が赤に変化した。

そのまま自宅へ続く細道に入ろうとした時、朱里は視界の端に揺れる何かを見た。振り返るとそこには花が添えられていた。

道路脇のガードレールの下、自動車と歩行者の境目にそれは置いてあった。誰かが不注意で落としたわけではない、冠婚葬祭の意が込められた花。

はっとしたように、朱里はその花を見つめた。何かを語りかけるような、訴えかけるような不思議な感覚を纏っている。

花以外の全てが透明に溶けてしまったかのように、朱里の視界にはそれしか目に映らなかった。まるで他の情報は不要である、と脳が判断したかのようだった。

一歩、朱里は花との距離を埋めた。じわり、と何かが胸の奥底で漏れて滲むような、波打つ感覚が流れてくる。

「ここ……知ってるかも」
誰にともなく、彼女はそう呟いた。

第４話　～疑念～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読み頂きありがとうございます（ぺこり

私の思春期／反抗期は小学校高学年～中学二年くらいまでだったと記憶しています。
人によって様々なのでしょうか。
男子か女子かでも、時期や傾向などの違いが出そうな気がして興味深いですね（笑

第5話　～罪悪の記憶～

朱里は辺りを見回した。首が慌しく動く。
交通量の多い道路。あまり広くない歩行者専用通路。遠くに見える心療内科の病院。
浮き出た疑惑は疑心暗鬼を生む。一度覚えがあるかもしれない、と思った途端に、どの景色も知っているような気がしてきたのだ。

不意に朱里の頭に、映像がちらついた。それは以前、平井が朱里に話した事故の一部始終と似ている。
図体ばかりが大きいトラックと、それが迫りくる恐怖。痛いほど耳朶に響く急ブレーキの音。
朱里はずきずきと痛み出したこめかみを押さえた。またか、と思った。朝もここを通った時に身体の不調を感じた。まるでそれは、自分はここにいてはいけないのだ、という身体からの警告のようだと思った。
妙にリアルな映像は、やはり過去に実際体験したものだからだろうか、と朱里は考えた。

痛む頭で朱里は道路へと視線を戻した。痛みが増幅されたように感じた。
「あぁ、もう」
またしても映像がちらつく。それは細切れに少しずつ、擦り切れたテープを再生するかのような画だった。
見上げる先に車。叫ぶ声。掴まれた腕。何かを訴える必死な表情。
そこで朱里は若干の違和感に気づいた。

どうしてこのモノクロな映像内で、自分の顔が映っているのだろうか、と思った。
その映像内で朱里に見える少女は切羽詰った顔で、ぐいぐいと”何者か”の腕を引っ張っていた。自分が見た記憶が映像として蘇ってきているのならば、それは自らを視点としてなければいけない。にも関わらずその”何者か”を視点とした映像になっていた。それが違和感の正体だった。

何故、と思った。
考えられるのは、事故の詳細を平井に聴き、その話を基に朱里自身が俯瞰(ふかん)的なイメージで想像し、それが頭に残っていた場合だろうか。何故このタイミングなのかは不明だが、そのイメージが脳内で再現してしまっているという説。
いや違う、と思い朱里はかぶりを振った。そんなイメージはした覚えがなかった。
それならば、と考えた時に思いつくことがあった。その瞬間だった。

朱里の脳裏に知らないはずの記憶が、フラッシュバックのように駆け巡った。
都内某所にあるビル。その映像では、自分は会社員として働いているように見えた。頬のこけた丸い顔をした上司が、憤怒の形相で顔を紅潮させながら叱責を繰り返している。自分は奥歯を噛み締めながら、ひたすらに耐えているのだ。
ただの映像であるが、それはまるで自分が叱られているように思える。肉迫してくる声は朱里の内面までも浸透してくるようだった。

「では、今週はこちらのお薬をお出ししておきますから」
白衣を着た医者はいう。軽薄そうに笑った。
「大丈夫、その内よくなりますよ」
不安げな顔で映像内の自分はその心療内科を後にしていた。
そこで朱里が見ている映像はぷつりと途切れた。

電気が走ったようにぴくん、と身体をひくつかせ、朱里は膝を付いた。地面を手に身体を支える。
顔を伏せたまま、朱里はそんなまさか、と小さな声を漏らした。
暑くもないはずなのに、冷や汗が次々と流れてきた。それは地に付いている手へと滴り落ちた。
「有り得ない」
それは落ち着かせるために、自身へ向けた言葉。成果は殆どないといってよかった。
朱里はふらつく足に力を入れてなんとか立ち上がる。

「でも、それじゃあ……僕は」

何か重大な事に気づいたように、朱里は片手で両目を覆った。その言葉は深刻さという重りを伴って、ゆっくりと地面へと落ちていく。
そこで朱里へと近づく足音がした。急ぐように短い間隔で鳴り響く。静寂の濃い今の時間帯では一層目立つ。
それは気が動転している彼女の耳には届かなかった。

「お姉ちゃん」
聞き慣れた声がして、ようやく朱里は目の前に人がいることに気づいた。
朱里の目の前、息を切らせた愛華が立っていた。息苦しそうに肩で呼吸をしている。
愛華は眉を吊り上げて「どこ行ってたの？　すっごい探したんだから」と怒鳴った。合間の深呼吸が、割り込むように声を遮らせた。
詰問調にも聞こえるそれに応える声はあがらなかった。

朱里の様子がおかしいこと事に勘付いたのか、愛華は手を伸ばした。しかし無常にもその手は空を切った。それに気づいた朱里が怯えるような目をして、一歩後ずさりをしたからだった。
ひっ、と声を漏らした朱里の声は震えていた。その怯えたような目は見捨てられそうな子犬を思わせた。
「違うんだ、違うんだよ、僕は……」
弱々しく首を振りながら、朱里は今にも逃げ出しそうな気配をみせた。そしてまた一歩、愛華との距離が離れた。
「お姉ちゃん落ち着いて」
朱里は愛華に背を向けた。愛華は駆ける寸前の朱里に手を伸ばした。その手が朱里の腕へと絡みつく。
「嫌だ、離して」
振りほどこうと朱里は無我夢中になった。我を忘れて腕を左右に振り払おうとする。
愛華は逃すまいと必死に力を込めているのか、朱里は振り切ることが出来ないでいた。何故朱里が暴れているか愛華には分からないはずだったが、このまま朱里を離してはいけない、と感じさせるような意思の強さがそこには宿っていた。今を見逃してしまったら、

二度と会えなくなるような予感めいたものに近い。

やがて疲れが見えてきた。朱里の振り払う力が段々と弱まる。
次第に抵抗は止み、朱里は完全に諦めた。愛華に抱きすくめられるような形になる。
それはいつかの病院での出来事を彷彿とさせる構図。あの時も朱里は茫然自失に近かった。

「やっと落ち着いた」と愛華がいった。朱里には、それが独り言のように聴こえた。
愛華が手を離した。朱里からいくらかの体温が逃げた。
逃げた体温を埋めるように、朱里は「違うんだ」と、同じ言葉をうわ言のように呟いた。
向き合うように立っているのに、朱里は愛華と目を合わせることが出来なかった。首を斜めにずらして、視線を受け流すような姿勢をとった。
「帰ろう」
愛華が提案した。どうやら問い詰める気は無いようだった。
けど、と朱里は渋った。愛華が不思議そうに見つめてくる。
自分の帰るべき家はあそこじゃない、と朱里は言いたかった。けれど今それを話したところで、愛華はそれを信じるだろうか。
やや躊躇いがちに「うん」と朱里は返事をした。それが彼女の下した判断だった。つまり、朱里は理路整然と説明出来るだけの言葉を持たなかった。
一緒に歩きながらも二人の中に会話はなかった。ただひたすらに

家を目指して歩いた。

玄関前に着いた。朱里はちらり、と愛華の横顔を見つめた。
「あの」
愛華の首が動いた。
「何があったのか訊かないの」朱里は疑問を口にした。
あれだけ騒ぎ立てたというのに、愛華は何も言ってこないのだった。すると愛華は口の端を少し持ち上げて、うーん、と唸った。
「話したくなったらでいいと思う」
朱里の胸中に申し訳ないという気持ちが広がった。説明出来る日など訪れない、と思ったからだ。
けれど、これだけ気に掛けてくれる愛華に対して、何かしらの説明はしてあげたいと感じた。嘘でも気休めでもいいのだ。そのままではあまりにも愛華が不憫ではないか。

家に着くと玄関では彩乃が待っていた。当然の如く心配の声をあげていたが、朱里としては誤魔化すしかなかった。ただの散歩だったのだ、と適当な理由を口にする。
彩乃は納得しない様子で訝しげな眼差しを朱里に送る。朱里は逃げるように自室へと走った。
そこでも愛華に対してと同様、気が咎めるような罪悪感を感じた。

その夜、朱里は寝付けずにいた。ベッドで横になり掛け布団を被ってはいるが、頭は冴えてしまって眠ることを拒否していた。
天井を眺めながら思う。

僕は彼女を殺してしまったのだ、と。

朱里は全てを思い出していた。
何故忘れていたのかも、何故思い出したのかも分からなかった。
恐らくきっかけは、あの置かれていた花だろうと推測した。彼女としてはあの手向け(たむ)の花自体に見覚えがなかった。しかしそれが誰に対しての手向けなのかは想像できた。
朱里は力ない表情で苦笑した。自身に対しての嘲りさえ混じっているようだった。それはそうだろう。手向けられた本人が、こうして生き長らえているのだから――

思い出した記憶が確かならば、自分は西本明であったはずだ、と朱里は思った。
あの日、考え事をしながら歩いていたのか、その時にどんな思考だったか定かではない。しかし歩道に出てしまったのは事実だ。
そして轢かれそうになった自分は、助けようとした女子学生を巻き添えに事故に遭ってしまった。
それなのに今、自分は生きている。その女子学生である藤宮朱里として。何かの皮肉としか思えなかった。

そして、それは結果だけ見れば、藤宮朱里という魂を殺してしま

ったことになるのではないか、と思った。
そう考えると、胸をズタズタに引き裂かれるような思いが込み上げてくる。自分なんか、という言葉が脳内を駆け巡る。今すぐにでもこの身体を返してあげたいと思った。文字通り、彼女の人生を奪ってしまったのだ。
けれどどうすれば良いのだろうか。本来の彼女はもう完全に消滅してしまったのだろうか。自分はこのままで生き続けるしかないのだろうか。
考えれば考えるほど、この先の不安と問題点が浮き彫りになってきた。それらに対する解答はそう簡単に見つからないと思った。

朱里は身体を起した。そのまま1階へと降りる。
キッチンへ入り冷蔵庫を開けた。中には多くの食材で溢れていて、数日は買い足す心配は不要に思える。
その中から牛乳パックを取り出し、コップへ注ぎ、それを一気に飲み干した。白い液体が喉元を通り過ぎる度、甘い香りが鼻を突いた。頭がクリアになったような気がした。
部屋へ戻った朱里は再び同じ体勢となった。つまり、ベッドへ横になり掛け布団を被ったのだ。

リフレッシュしたかのような頭は、何の進展ももたらさなかった。
堂々巡りの思考は、とうとう終わりをみせなかった。気づけばカーテンの隙間から、淡い日の光が差込み始めた。
それでも全く眠くない、と思った朱里は、そこである重要な事柄を思い出した。

夢の中に出てきた動物だ。恐らく犬であった、と徐々にその姿が脳裏へ浮き出てきた。

いや、と思った。あれは夢ではなかったのだ。

そして彼はいっていた。『女性として生きるんだ』と。

つまり、彼が意図的にこのような状態にさせたのかもしれない、と朱里は考えた。そう考えれば、彼にもし会うことが出来るのならば、元の状況に戻すことが出来るかもしれない。

わずかに希望の光が見えたことに、朱里は少し安心した。

しかしそれも束の間だった。

なにしろ彼に会う手段がないのだと思い至る。雲間から差し込んだ光が再び、厚い雲に隠れた気分だった。

もやもやとした気持ちの中、ドアがノックがされた。

朱里は返事をしようとしたが、声が出しにくいと感じ、出掛かった声は肺へと落ちた。昼間に動き回り疲労した上、夜通し考え事をして休んでいない反動だろう。

「おはよう」

ちょこん、と顔をのぞかせたのは愛華だった。少しだけ遠慮しているような気配があった。

朱里はおはよう、と返事をした。今度は声が出た。多少上ずっている。

愛華は心配そうな目で朱里を見つめた。

それに気づいた朱里は「もう大丈夫」といった。「きっと不安だったんだ」と付け足す。
それでも愛華は険しい表情のままだった。納得していない様子の愛華に、朱里は更に口を開きかけた。
「嘘だよ、それ」それは愛華によって遮られた。「まだ辛そうだもん」
朱里は何も言えなかった。
だから、と愛華は続けた。
「また不安になったら言って。一緒に居てあげるくらい出来るんだから」
励ましているのは愛華なのに、その目は縋(すが)るような色をしていた。お願いだから頼って、とその目は訴えているように見えた。

愛華が出て行き、朱里は一人になった。
朱里は曖昧に笑うことしか出来なかったことに、自己嫌悪の念を抱いた。いや、他に最たる理由があった。
所詮、自分は本物の朱里ではない。
今も現在進行形で家族を騙していることになるのだ、と思った。そう思うと今までのように、上手く接することが出来なくなっていた。何をしようとしても不自然になってしまう。あんなにも無償の愛を投げかけてくれているのに、それを受け取る資格がないのだ。

憂鬱な心を抱えたまま、朱里はベッドへうつ伏せになった。
彼女は声をあげずに嗚咽を漏らした。愛華に対する罪悪感を吐露するかのようだった。

第5話　～罪悪の記憶～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読みいただき、ありがとうございます！

若干の鬱展開ですみません（土下座）
シリアス成分が多目だと、離れちゃう方とかいるのかなぁなんて思ったり。
まぁそんな心配してちゃなんにも書けないのですが。笑

ともあれ、引き続き本作品をよろしくお願いします。
評価・感想・意見・誤字脱字のご指摘もお待ちしておりますので！

第6話　～静かな奮起～

朱里の記憶が戻ってから三日目の夜だった。
彼女は溜息をついた。もう何度目になるのか分からない。それらが積もり積もっていくのだとしたら、それで一山を形成出来てしまうほどだった。
今もこうして、この先どうすれば良いのか分からずに途方に暮れていた。結局は夢の中に出て来た動物に会う手段など、到底思いつくはずがないのだ。

この三日間、彼女は自分がどう過ごしたのかさえ、記憶が不鮮明だった。
死んだようにベッドで横になり、ひたすら考え事に没頭していた。いや、没頭している振りだけで、その実、何も考えていなかった。
空腹など訪れなかった。心配になった母の彩乃が二階へ呼びに来てようやく食事をする有様だった。その食事もろくに喉は通らずに半分以上を残した。思い出したようにトイレへ行き、何となく水分を補給し、気づいたら眠りに落ちている。それの繰り返しだった。
死んだように生きている、とはこの事を指すのかもしれない。
彩乃は、突然心を閉ざしてしまった娘に、どう接したらよいのか考えあぐねている様子だった。そんな彩乃の様子に心苦しさを感じつつも、朱里はそれに応える余裕はなかった。

ノックが響いた。大きめの音を長めの間隔で二回繰り返した。その特徴から愛華だろう、と朱里は思った。
「お姉ちゃんいる？」
朱里は返事をしなかった。掛け布団を頭まですっぽりと覆った。

誰とも会いたくない気分だった。
ドアの開く音がする。足音が近づいてくるのに朱里は気づいた。
「寝てるのかな」愛華が布団へと声を落とした。
またしても朱里は答えない。早く部屋から出て行って欲しい、と思った。
すると突然、朱里の暗い視界に光が差した。掛け布団が奪われた、と分かったのは、上から覗き込む愛華と目が合ってからだった。
少し責めるように口を尖らせて「やっぱり起きてた」と、愛華はいった。
朱里に返す言葉はなく、目を横に逸らした。放って置いてほしい、という意思表示のつもりだった。

「今日もご飯食べてないでしょ」
「いらない」
取り付く島もなかった。ぎゅ、と枕に力を込めながら朱里は横を向いた。思わず棘のある口調になってしまったのに朱里は気づいたが、今更取り繕う気にもならなかった。
愛華は息をついて「だめ。食べなきゃ倒れちゃう」といった。ついた息にはほのかな諦念(ていねん)が混じっているようだった。
「倒れたっていい」
その諦念にもう一押しするつもりで朱里は投げやりに答えた。掴んでいた枕がその言葉と共に形を歪め、真白いシーツにいびつな皺が刻まれる。その答えに愛華は息を呑んだ。
その言葉は予想以上の効力を発揮し、心配する愛華を黙らせた。包まれた沈黙がそれを物語っている。望んだはずの静寂が、朱里の心にずっしりと圧(の)し掛かってきた。

「いいわけ無いよ」
わずかな空白を経て、愛華は悲しげに呟いた。
「どうしてそんなに、自分を捨てられるの？」
朱里は向けていた背を翻して愛華を見た。彼女の表情は今にも泣きそうな曇り空で朱里の胸を打った。自分がそんな表情にさせてしまっているのか、と思い朱里の胸中に暗い動揺が走る。
「だって」と朱里は口を開いた。それは何か伝えようと思ったわけではない。思わず口をついてしまっただけだった。
愛華はぴくり、と顎を引いた。だって、何だと言うのだろう。その先をどう継ぐべきか朱里には分からなかった。
自分は朱里という存在ではなく、明という男性なのだ、とでも言えばよいのか。それとも自分は君たちを騙してる最低なやつなのだ、と告白すればよいのか。朱里にはどれも相応(ふさわ)しくないように思えた。
「愛華はさ」朱里はベッドから体を起こした。二人の視線が交錯する。
「自分なんか要らない人間だ、って思ったことある？」
真意が読み取れず、愛華は困惑した表情になった。次に彼女は、その先にある意図を探るようにじっと朱里の目を見つめてきた。
言ってから、なんて馬鹿な質問をしているんだろう、と朱里は思った。遠まわしに今の自分の心境を吐露しようとしているだけではないか。そんなものを押し付けても、愛華を困らせるだけだ。
「ごめん、変なこと訊いた」
質問をかき消すように軽く首を振った。

「思ったことはないけど、でも」
「え？」
幕引きのつもりだった朱里には不意打ちに等しかった。声が漏れ

る。
「そんなの意識次第だと思う」
「意識、次第？」
うん、と頷いて愛華は真剣な眼差しで続けた。
「要るか要らないか、なんて誰が決めるの？　明確な基準があるの？」
「それは」
矢継ぎ早な問いに朱里は口をつぐんだ。それ自体が答えだった。
「でしょ？　曖昧過ぎて誰にも分からないと思う」
愛華は後ろでに手を組んで目を伏せた。
「そんなことばっかり気にしてたら、私だったら人生疲れちゃうなぁ」自身の足元に目をやりながら、彼女はそうぼやいた。
朱里にとって、それらの言葉はハンマーで頭を殴られたかのような衝撃を伴っていた。その衝撃は凝り固まった朱里の常識にヒビを入れる。
朱里は惚けたように遠くを見た。
明確な目的を持って質問したわけではなかったが、意外にも実のある回答をもらった。目を閉じ、その言葉を咀嚼して反芻する。
そして、確かにと朱里は思った。
自身のアイデンティティーに思考を巡らせ、答えが得られずに悶々とした日々を過ごす。誰しも、こういったことは一度は考えたことがあるのではないだろうか。そして、それに対するはっきりとした回答を得た者は一体どれだけいたのだろう。

「少なくとも」
声が聞こえ、はっとしたように朱里は目を開けた。彼女の瞳には真摯に佇む愛華の姿が映った。
「お姉ちゃん居なくなったら、私が寂しいよ。それじゃダメかな」

朱里は目を見張って体を強張らせた。姉妹愛を掲げているはずのその言葉は、朱里の心を鋭角に抉(えぐ)る。
「そんなこと」
言わないで、と朱里は続けたかったが震えた声は最後まで続かなかった。
彼女の内側から急激に込み上げるものがあった。目頭が熱くなるのが分かった。それを必死で押し留めようと努力した。
そしてそれは失敗に終わった。洪水のように溢れ、涙という形に変化した。
くしゃりと顔を歪めて、朱里は自身の肩を抱いた。ポロポロとした雫が床を湿らせる。
「ど、どうしたの」
愛華は朱里の肩を支えた。狼狽した様子が声の調子に出ている。
くぐもった嗚咽が部屋内に響く。
何か言おうとしたが、朱里の嗚咽はひどく音像を結べてはいなかった。
要領が得られないまま取り乱す姉に、愛華は困りきった表情を浮かべ、心配そうに手を添えていた。
「ごめん、ごめんなさい」
ようやく聴こえた言葉に、愛華は眉根をひそめた。この状況で謝られても、泣いてしまってごめんなさい、としか取れないはずだった。
そう解釈したのか「気にしないで。ほら、一旦横になって」と愛華がいった。とても静かな落ち着かせようとする響きだった。
愛華が朱里の手を取って、ベッドへ誘導する。
助けがなければ歩けないほどでは無かったが、朱里は何も言わずにその手を取った。そのままもそもそと寝床へ潜り込んだ。
使い物にならない喉の変わりに、朱里は心の中で何度も何度も謝

罪を繰り返した。
――姉を奪ってごめんなさい、と。

横になった朱里は目を閉じた。デジタル時計の分数を示す数字が二回変化した。
愛華はベッドの脇に腰を下ろして、何も言わずに黙っていた。それは決して気まずい時間、というわけではなかった。
朱里は目を開いて息をついた。
「落ち着いた。ありがとう」
朱里の眼は赤く充血していて、明らかに泣き腫らした後の顔だった。端整な顔立ちはそれくらいではびくともしないようで、損なわれない輝きが残っている。
「本当？　良かった」
そういって彼女は自身の胸に手を当てた。姉の言葉に愛華は微笑む。
朱里は少し躊躇うようにして、「愛華が、あんなこと言うから」といった。
告白した涙の理由。それさえも嘘をつかなければいけないのか、と朱里は胸中に圧迫感を感じた。本当の理由は心の中で擦り切れるほど繰り返したばかりだ。
「あんなことって」
「だから。寂しい、って」
愛華のセリフを朱里が引用してみせる。朱里は恥ずかしそうに語尾を萎ませた。
愛華は少し困ったような表情を作り、「本当のことだし」と返す。困ったように見えるのは表情だけで、あっけらかんと言ってのける。
そういう気恥ずかしいことをさらりと言える愛華の純真さが羨ましい、と朱里は思った。
でも、と愛華は口の端を持ち上げて「私のせいだったんだ」とい

った。
「え？」
「私が泣かせちゃったんだよね？」
「そ、そうだけど、その言い方はなんか違う」
聞いていないのか、愛華はそっかそっか、と嬉しそうに何度も白い首を動かして頷いた。
しかし何かに気づいたように愛華は考える仕草をして、壁に目をやった。
「でもお姉ちゃん、そういうので感極まるタイプじゃなかったはずなんだけどなぁ」
そういって彼女は首を捻った。
朱里はどきりとした。そういった昔の違いを指摘されることに、いちいち胸が跳ねる。
以前は記憶が無いから、と自分自身を納得させていた。けれど今は違う。事故前と事故後では本当の意味で、別の人物となっているのだ。
真実を知ってしまっているからこそ、それが露見することに恐れを抱いてしまう。同時に後ろめたさや罪悪感も募っていく。
「そ、そうかな？　よく分からない」と、朱里は曖昧に濁した。
「ふぅん。そんなものなのかな」
分かったのか分かっていないのか、微妙な返事だった。

自室で少し休んだ後、朱里は食事を摂ることにした。
一階のリビングへ降りると、テーブルの上にラップに包まれたお皿がいくつも並んでいた。
お皿の一つに一枚のメモ書きが置いてあった。淡いピンク色をしたメモだった。擬人化されたうさぎの絵が描かれていた。
『朱里へ　お腹空いたらレンジでチンして温めてから食べなさい。

年頃のダイエットに良い事なんて無いんだからね　母』
それを見て、朱里は寂しそうにほほえんだ。心にちくりとした痛みと優しい温もりを感じた。
メモを丁寧に剥がしてから、綺麗に折りたたんだ。

温めた献立に手をつけながら、朱里はぼんやりと考えた。愛華との会話を回想する。
愛華は恐らく、先ほどのやり取りの中でこう思ったのではないか。
姉は記憶が戻らない事により他人との距離感が掴めずにいる。結果、自分は必要とされていない人間なのではないか、と精神不安定な状態に陥っている――
それはそれであながち間違ってはいない。そう思ってしまうことも多々あったはずだ。だから、愛華の気にしたら疲れる、という言葉は救われた気がした。

三つのお皿とお米が盛り付けられたお茶碗が並ぶ。大きめの平たいお皿には鳥の唐揚と、千切りにされたきゃべつが鎮座している。小皿には大根と竹の子の煮付け、漆のお茶碗にはお味噌汁があった。
鳥の唐揚を口に運ぶ。咀嚼するとじわり、と肉汁の旨みが口内一杯に広がった。

しかし、と思う。本当に悩んでいたのは別の事だ。
それは朱里を事故で死なせてしまったことだった。そのくせ、自分はのうのうと生きながらえている。
日記に書かれていたような日々がこれから先も彼女を待っているはずだった、と思うと胸が張り裂けそうな気持ちになる。
自然と咀嚼する口が遅くなった。味噌汁で無理矢理に喉の奥へと追いやった。熱い液体が喉元を通り過ぎる。絶妙な塩加減だった。
そして煮物へと箸を伸ばした。

罪悪感で心が蝕まれていく中、先ほどの愛華の訪問である。
『お姉ちゃん居なくなったら、私が寂しいよ』
彼女の言葉を聞いてその想いは増大した。
愛華にとっては仮の言葉だ。この先もあり得ないと思っているのだろう。あり得ないと思っているからこそ口に出せたのかもしれない、と朱里は考えた。
そして真実を知った時、愛華はどんな反応をするだろうか。朱里には想像が付かなかった。
もちろん、言葉に出して信じてもらうのは難しいだろう。けれどもし、理解出来てしまったら。
そんなわけない、と涙するのか。姉を返せ、と憤然と吠え立ててくるのか。全く分からなかった。
それでも朱里は思った。
どんな反応であろうと、恐らく喜ばしいものであるはずがないのだ、と。

唐揚の濃い目な味付けはご飯の進みを非常に促進した。
お茶碗から覗くお米は、既にその姿を消している。煮付けの残りも食べ終えて、味噌汁を飲み干す。最後に残ったのはきゃべつの千切りだった。
朱里は冷蔵庫からドレッシングを取り出した。それを葉物へかけて箸で混ぜ合わせた。
朱里は最後にドレッシングであえた野菜を食べるのが好きだった。最後のデザートを食べるような感覚だった。
全てを食べ終えて食器を洗った。濡れた手をタオルで拭き、すぐに自室へ戻った。

朱里は床にぺたんとお尻を付け天井を仰いだ。愛華の笑顔が思い出される。ピンク色のメモに書かれていた、彩乃の丸っこい可愛ら

しい筆致が頭をよぎる。
それらと共に朱里が思うことは一つだった。
どうあっても、彩乃と愛華が悲しむ姿は見たくないのだ。
この気持ちは何なのだろう、と思った。
友情ではない。では家族愛か。そうであればいいな、と彼女は思った。

悲しませないようにするにはどうすればよいのか。
現状、このまま朱里を演じ続けるのが一番だと思い至る。
この決断が正しいものなのか分からなかった。覚悟と言い換えてもよい。

ふと気づいて、朱里は自嘲の笑みを浮かべた。
病院で目覚めた夜も、そんな風に悲しませたくないと思ったことを思い出したのだ。
結局は記憶が戻る前から、朱里が今改めて覚悟したことを、無意識に考えていたのだ。それが無意識から決意へと変わっただけだ。
自身の内面を確認した朱里は、心が軽くなっていくを実感した。
このまま日常をこなしていけば、いずれ今の状況を解決する糸口が見つかるのではないか。そんな根拠のない予感さえしてくる。
いつまでも引きこもっているわけにはいかない、と静かに奮起した。

それは突然だった。部屋の扉が音もなく開いた。愛華と目が合う。
「あのね」
どうしたの、と朱里は先を促した。
「お風呂沸いたってー」と愛華が明るくいった。妙に楽しそうな雰

囲気を纏っている。
ぴくり、と朱里の眉がわずかに動いた。
「あ、ありがとう。愛華はもう入った？」
「まだだよ？」首を傾げる愛華は不思議そうな顔をしている。
「じゃあ先入っていいよ」
「何か手が離せないことでもあるの？」と愛華が尋ねる。その目は怪訝そうに揺れていた。
「あ、えっと……そういうわけじゃないんだけど。ご飯食べたばっかりだから、少し時間を置きたくて」
すると得心したように愛華は頷き「あっ、そっか。じゃあ、私先に入るね」
そうして彼女は湯浴みの仕度へと戻っていった。
閉じられた扉を見つめながら朱里は脱力した。傍にあったクッションへ身体を預ける。うつ伏せの状態でお腹の辺りにクッションが当たっている。
「はぁ」と、深いため息をついた。万歳のように投げ出された二の腕が、朱里の視界に入る。
右手で左にある二の腕を掴んだ。それは恐る恐るといった体で、触れたら壊れると思い込んでいるのではないか、というほどに慎重だった。
掴んだ腕からは柔らかい餅肌の触感が返ってきた。
「はぁ」
そうしてまた、同じため息を吐き「分かってたけど、やっぱり女の子だよなぁ」と呟いた。
「お風呂……どうしよう」
朱里は目を細めて嘆いた。

第6話　～静かな奮起～（後書き）

ども。作者です。

ここまでお読みいただきありがとうございます（ぺこり

ご感想、評価、ご意見、ございましたらお願いします！

早く朱里を学校に行かせてあげたいのですが、お話が中々進みません。

その前にお風呂どうしよう。

第7話（1）　～朱里の場合～（前書き）

８月２３日付けで、当作品を章構成へと変更しました。
よろしくお願いします。

第7話（1）　～朱里の場合～

朱里は頭を抱えていた。無理だ、と悶々とした唸りをあげている。
脱衣所にある細めの姿見を前にして朱里は立ち往生していた。
姿見には幼い西洋人形のような顔立ちの少女が映っている。薄い茶色の髪には緩めのウェーブが掛かっており、それは整った目鼻立ちを際立たせるように大人の風格をほのかに添えている。華奢な身体に細くしなやかな手足が伸びていて、その健康的な白さは指先まで続いていた。低めの身長に豊満なバストがアンバランスに主張している。

脱衣所の奥は浴室となっている。
愛華にお風呂が空いた、と言われた朱里は入浴するかどうか散々に迷った。その上で不本意ながらも、脱衣所までは足を運べた。
脱衣所に来た以上、通常は衣服を脱ぎ、浴室へ移動し、入浴を開始するものだろう。
しかし彼女はそこまで行き着くことなく、浴室を前にして進めずにいた。

朱里は事故以前の記憶に思いを馳せた。
そこには若い成人男性の姿が浮かび上がった。
女性が苦手で上手く会話をすることが出来なかった彼は、結果として、異性と付き合った経験はついに訪れなかった。

当然ながら、事故後に入浴することは幾度となくあった。しかし、その時は自身を女性だと思い込んでいたし、それが他人の身体であ

るなどと夢想さえしなかった。
朱里は記憶が戻ってから初めて、鏡に映る少女を見た。そこに映るのは全くの見知らぬ少女だった。異性と付き合ったことのない明として考えれば、それは今までの常識を覆すほどの衝撃である。
入浴をするには服を脱がなければならない。服を脱ぐ、ということは裸になることと同義である。それを想像しただけで朱里は顔の温度が上がってくるのを自覚した。
「これなら、記憶なんて戻らなければ良かったのに」
朱里は涙目になりながら一人ぼやいた。
次に脱衣所にある小さな丸い椅子に腰をかけた。真面目な顔をして思案にふける。愚痴をこぼすだけでは進展しない、と朱里は思ったのだ。

彼女が入浴にあたって腹をくくったのは割りと早かった。
前途多難であることは想像に難くなく、心はずっしりと重くなっていたが、これを怠ることによって健常的な生活が遠のくのが我慢ならなかった。その想いだけを胸に、勢い任せで脱衣所へと向かった。無策であった。結論からいえばいざ、という時になって鏡を前に尻込みしてしまう有様だった。

「そうだ」
やがて何か思いついたのか、両手をパチンと合わせた。よほどの名案と思ったのか、叩く手はよく弾んだ。
彼女は脱衣所を出て、リビングへと向かった。
リビングの端には小さな襖があり、その奥は物置となっていた。以前病院から帰宅した際、荷物の一部をここにしまった。その時に知ったのだった。スペースはあまり広くないようである。朱里はその中から一つの布切れを手に取った。灰色で細長いはちまきのような形だった。額に巻くにはぴったりだろう。

脱衣所に戻る途中で愛華と遭遇した。彼女は朱里の手にあるものに、目を留めた。
「あれ？　何でそんなの持ってるの？」
しまった、と朱里は思った。
「こ、これは」朱里の不審な様子に妹は何かを感じ取ったらしく、ずいと愛華は顔を近づけてきた。
「何でもないから」叫ぶように言い放ち、朱里は脱兎のごとく逃げ出した。向けた背から、何かを言う愛華の声を感じた。聴こえない振りをして朱里は脱衣所へと急いだ。
朱里が脱衣所へと戻ったときには肩が上下していた。息を整えながら、なんて自分は臨機応変な対応が出来ないのだろう、と心が重くなった。何も逃げ出すことはなかったのではないか。
しかしそこで事情を説明しようにも、その説明が殊更（ことさら）に難しかった。どのような説明をするにしても、自分が元男性だった経緯は伏せねばならない。それを踏まえた上で今からやろうとしていることを説明しなければならないのだ。それがどれほど至難なことか、考えるだけで知恵熱が出そうだった。そして彼女は、要らぬ心配を掛けるくらいならば黙っておいた方が良い、と判断を下した。

鏡を前に朱里は布切れを手に取った。それで目を覆い、後ろに結んだ。
すると、朱里の視界はたちまち暗闇に包まれた。完全な暗闇ではない。脱衣所の照明が、布切れにある繊維と繊維の間を縫って網膜へと差し込んでいるのだろう。そのほんのわずかな光が朱里の視界を照らていた。
朱里の考えた案は目隠しをすることだった。目隠しをすることで少女の裸体が視界に入らなければよい、という結論に達したのだった。勿論、暗澹（あんたん）たる視界の中では動作が困難だろうことを覚悟した上だった。

早速、彼女は衣服を脱ぎにかかった。手探りで胸のボタンを外す。
「あっ……」
朱里は思わず声を漏らした。ひんやりとした空気を胸に感じたからだった。その空気は、空いたボタンの隙間から胸の谷間へと入り込んだ。
そうか、と朱里は思った。視界が遮られた場合、それ以外の四感が失った視覚を補おうとする。そのため視覚以外の五感が研ぎ澄まされたような気がした。自らの息遣いが耳朶に響く。それは妙に艶っぽく聴こえた。
朱里はすぐに作業を再開した。
上着を脱ぐために、両手で交差してながら裾の部分を持った。そのまま上へと引き上げる。
手早く済ませようとしたために焦り、存外に乱暴になってしまった。服はすっぽりと抜けきれなくて、肩の辺りに引っかかってしまう。その拍子に体全体にも力が加わり、朱里は後ろから誰かに背中を押されたような感覚を覚えた。
暗闇の中、外部から力が加えられるとどうなるか。方向感覚が普段よりも落ちているため、自分が無重力にでもいるかのように上下左右の感覚に自信がなくなる。
朱里はバランスを崩し、床に転がった。その瞬間に盛大な音が響く。騒音めいたその雑音は家中に拡散していく。
痛みに呻いて朱里は腰に手を当てた。転んだはずみで服は脱げていた。
じんわりとした痛みの次に感じたのは焦りだった。今の音を聞きつけて誰か家の者が様子を見に来るかもしれない、と思ったのだ。半裸で目隠をし、床に寝そべっている状態の彼女は、到底他人には見せられない格好であることは誰の目にも明らかだった。
薄暗い視界の中、床に手を付いて起き上がろうとする。
「お姉ちゃん、今の音は」

扉を開け放つ音がした。愛華が姿を見せた。同時に朱里は息をのんだ。手の平に冷や汗が滲み始めた。

幸運というべきなのか、目隠しの取れていない朱里には、愛華がどんな顔をして朱里を見ているのか分からなかった。

第7話（1）　～朱里の場合～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読みいただきありがとうございます（ぺこり

ほぼ週1ペースだったのですが、少し乱れてしまいました。
なるべく頑張りますが不定期になってしまいそうです。
まぁそこまで楽しみにしている方は、そう多くないと思いますが！笑
楽しみにしている方がいれば、それはそれでとっても嬉しいことです。えぇ。

第7話（2）　～愛華の場合～

「はぁー、温まる」
ティーカップから口を離し、愛華は息を吐いた。カップの中身は蜂蜜をお湯で溶かし、少量の生姜を加えたものだった。お風呂上りには必ず飲むようにしていた。
蜂蜜を材料とした飲食をしていると、体に良い気がして愛華は好きだった。目に見える効果は今のところないが、高校受験をする頃ぐらいから習慣づいている。
半透明の液体を眺めながら、姉はあまり好きではなかったな、と思い出した。

「体に良いんだよっ」
「だって甘すぎるじゃん」
愛華が中学生の頃、朱里に勧めてみたことがあった。しかし甘いものが得意ではない姉は、一口飲んでから愛華に付き返したことがある。
「それが良いのになぁ。病気に強くなるよ、多分」
「いいのいいの。私は風邪なんか引かないし」
確かに朱里は昔から風邪を引かなかった。活発な性格が如実に現れているようだった。それに改めて気づき、愛華は楽しそうに笑った。

愛華は昔を思い出して切なくなった。スプーンでかき混ぜながら、こう思った。
今の私をお姉ちゃんが見たら、何を飲んでるのと訊いてくるのだろうか、と。そこに悪意はない。けれど事故前であれば決して訊くはずのない事だった。そんな些細な事でも寂しく思ってしまう自分は弱い人間なのだろうか。

「よく飽きないわね」
艶がかった声が聞こえ、振り返ると彩乃が立っていた。おそらく蜂蜜のことをいっているのだろう。
「好きだからね。お仕事終わったの？」
「まぁ、ひと段落ってところかな」
「そっか、お疲れ様」
愛華は笑顔で労いの言葉をかけた。
彩乃はくすり、とかすかに口の端を持ち上げてから、肩をほぐす仕草をした。それを見ながら「肩凝ってるの？　マッサージしよっか」と訊いた。
彩乃は首をゆっくり回し、娘へと目を向けた。その瞳は優しく慈愛に満ちているようだった。そして軽い調子でこういった。
「ううん、大丈夫、ありがとう」

姉妹の母――彩乃は現在シングルマザーだった。離婚したわけではない。5年前に夫である藤宮透（とおる）が他界したのだ。病死だった。まだ四十歳と、とても若かった。
生命保険に入っていたために、当面の生活費に困ることはなかった。しかし、彩乃は葬儀の半年後には仕事を探し始めた。何かしていないと不安だったのだ。
そこで彼女が一番懸念したのは家に居られなくなることだった。仕事に追われて娘たちとのコミュニケーションが減ってしまうことを恐れた。特に中学校に上がったばかりの愛華が気がかりだった。そして、その懸念を解消するために就いた仕事は自宅翻訳家だった。留学経験もあり英語は堪能だった。

自宅での翻訳稼業は思った以上にハードだった。朝は母親としての仕事がある。娘たちを学校へ送り出してから昼食までは仕事。それを挟んだ後は午後三時まで再び仕事に戻る。その後は家事に追われることとなり、再開できるのは午後九時になってしまうのだった。時には深夜に及ぶこともある。

他にも、どのような仕事にもあることだが、納期が存在することも悩みの種だった。期限が守れない場合、企業との信頼関係が築けずに依頼が減ってしまうことも少なくない。

また、語学能力に優れていても、それらを翻訳しようとするのは別問題だった。英語力以上に日本語力を必要とした。英語の意味が理解できても、それをどのように日本語で表現すべきなのか分からなかった。しかしこの数年の間で慣れたもので、今ではある程度時間に余裕を持てるようになっていた。

仕事と家事をこなし、自分たちを育てている母を尊敬していた。それは女性としての尊敬も含まれていた。少しでも母の負担を減らそうと、愛華はなるべく家事を手伝うようにしている。

「あら、朱里ご飯ちゃんと食べたのね」

「あ、うん。ちょっと持ち直したみたい」

彩乃は少し考えるように黙り、「難しい年頃の上に、あんなことがあったら……」と口を開いた。

「でも今は大丈夫だよ。お姉ちゃん」

「そうなの？　ごめんね、愛華に任せてしまって」

申し訳なさそうにいう彩乃に対して、愛華は首を横に振った。

「ううん。私もお姉ちゃん心配だし、何とかしてあげたいもん」

そっか、と彩乃は小さく呟いて微笑んだ。愛華の頭を撫でながら
「貴女の方がお姉ちゃんみたいね」といった。
「そんなことないよ」と愛華は謙虚にいう。そして思い出したように「そういえば」といった。
「どうしたの？」彩乃が質問する。
「あ、あのね。お姉ちゃんのことなんだけど」愛華は唇を少し舐めた。喉が渇いていた。
「最近、口調が何だか女の子っぽくないというか、えっと何ていうか」
愛華は自身でもどう表現してよいのか分かりかねていた。言葉を選びながら、どうにか伝えようとしている。
「女の子っぽくない？　男っぽいってこと？」
彩乃は要領を得ない様子だった。
「男っぽい……。あぁそうかも」
天井を仰ぎ見ながら納得の表情を浮かべる。考えたこともなかったため、その発想はなかった。そしてその表現は愛華の中にぴったりと嵌(はま)った気がした。
「うーん。記憶がない今だけだと思うけどねぇ」
彩乃は険しい顔で唸った。そしてこう続けた。
「今度病院に行った時に、先生にそのことも相談してみるね」
「うん。あ、それ私も一緒に行っていいかな」
その言葉に母は首を縦に動かし、了承の意を示した。
そこで彼女は書斎へと戻っていった。仕事を再開するのだろう、と愛華は思った。母の後ろ姿を見送りながら心の中でエールを送った。

湯気立つカップを手で包み持ちながら見つめていると、不意に大きな音が遠くから響いてきた。まるで物量のある物が床に落ちたような音だった。その音に愛華は驚いた。
愛華はカップをテーブルに置くと椅子から立ち上がる。何が起きたのか確認するためだ。
どこだろう、と思った瞬間、閃きに近い勢いで姉の顔が頭をよぎった。先ほどの不審な行動が思い起こされる。彼女はその勘を頼りに浴室へと向かった。

「お姉ちゃん、今の音は」
声と同時に愛華は扉を開けた。

脱衣所の扉を開けた愛華は、眼前に広がる光景に目を疑った。思わず目を大きく見張った。ショックで息が止まりそうだった。
それもそのはずだった。脱衣所には小柄な少女がいた。彼女は目隠しのされた状態で床に臥(ふ)せていた。その上、服は着ておらず下着姿を晒している。大きめの胸が床に当たって、その球体は形を歪めていた。

愛華が一瞬にしてその想像へと及んだのは当然といえた。大きな音、目隠し、下着姿。これらから連想されるものは――
足だけは自然と動いたようだった。彼女は少女の傍まで駆け寄り、すぐさま目隠しを解いた。そこには目頭に雫を光らせた朱里がいた。
「だ、誰にやられたの？」
それは加害者が存在すると仮定した言葉。愛華の心中は平常ではいられなかった。泣きそうな顔で朱里を起こし、どこかに傷がない

かを確かめる。
体中をまさぐられた朱里は、くすぐったそうに身を捩(よじ)った。
「そんな触らないでって、大丈夫だから」
「え、だってそんな」
そこで愛華は目を丸くした。徐々に溜飲が下がっていく。目隠しに使われた布をよく見れば、それは先ほど朱里と遭遇した際に彼女自身が持っていた物だった。愛華の中で一つの考えが生まれる。その考えを口にしてみた。
「自分……で、やった、の？」
まさか、と愛華は思った。その自信の無さは顕著だった。言葉の端々が途切れてしまう。
朱里はすぐに答えられなかった。ばつの悪そうな顔をして、曖昧に笑みを浮かべている。それを肯定と解釈し、愛華は言葉を続けた。
「信じられない」
「ちっ、違う違う」
一体何が違うというのだろうか。朱里は頬を赤くして強く否定した。
「じゃあ、どうしてこんなことを？」
「そ、それは……っ」

つい詰問めいた口調になってしまうのを愛華は自覚した。それに対しての朱里の反応は歯切れが悪かった。
愛華には、姉がどうしてこのような行動に至ったのか、まるで想像が付かなかった。奇妙としか例えようがなく、そこには未知の世界が広がっているように思えた。だからこそ気になったのだ。ここはどこまでも追求しようと心に決めた。また、自分に隠れて何かしようとしていたのなら、それは恐らく困っていたからに違いないと考えた。そうであるならば、それを話して欲しいと思った。

「それは？」と愛華が繰り返し訊いた。
すると、姉からは呻きとも唸りとも判別の付かない返答が返ってきた。
仕方ないな、というように愛華は一つ息を吐いた。それに合わせて肩が瞬間的に上下した。そして愛華はいった。
「言えないことなんだ？」
その声は努めて低く、ゆっくりとしていた。同時に目が合い朱里の細い肩がぴくりと揺れる。愛華の目は笑っていなかったからだ。
「そういうわけじゃないけども、何ていうか……怒ってる？」
いたずらが見つかった生徒が教師に言い訳するように早口でそういうと、彼女は愛華の顔を伺った。
その言葉に愛華はもどかしい気持ちになった。眉根が下がる。いつだって姉は自分の心配する気持ちなど感じ取ってくれないのだ、と思った。みるみるうちそれは胸中で膨張を始めた。元々ここ一週間の間、常に愛華のそばを付きまとっていた感情。やがてはみ出た激情は喉元から吐き出される。
きっ、と朱里を見据えて「当たり前でしょ」と愛華は声を荒げた。
思わぬボリュームに朱里はおろか、愛華自身も驚いた。我に返った愛華は思わず口元に手をやった。しかし吐き出す言葉は止まらなかった。
「今日は言わせてもらうけど」
もう後には引けなかった。

「どうしてそんな変なことばっかりするの？　記憶がなくて不安なのは分かるけど、それにしたってこんな……大体隠し事までして、その上で怪我しそうになるなんて、私がどれだけ心配してるか分かってるの？」
何も答えない朱里に愛華はぽつりと添えるように続けた。「分か

ってないよね、絶対」
きょとんとした表情のまま朱里は固まっていた。やがて悲しそうな顔になり、何かを逡巡しているように見えた。
しんと静まり返る室内。二人の間に何ともいえない雰囲気が流れた。
愛華は期待が裏切られたような気がした。これだけ想いをぶつけても、それに対する返答がなかったのだ。朱里は右手で肘を抱くように押さえて、目を逸らしていた。
「ご、ごめん」
間をとりなすように愛華は謝った。「大声出しちゃった」言いながらもう諦めよう、と彼女は思った。

踵を返し、脱衣所のドアノブに手をかけた時だった。触れた指先から、かちゃりと音がする。
「悪かった」
朱里の声に愛華は振り返った。後悔を思わせるため息と共に、居たたまれなそうな顔つきをした朱里がそこにいた。
「全部話すから」息を呑み、朱里はかすかな間を開けた。
「そんな風に思ってるなんて全然気づかなかった。余計な心配させないために黙ってたけど、行動が伴ってなかったみたい。逆にそれで心配されるなんて世話ないなぁ」
朱里は目を伏せ、誤魔化すように頬を掻いた。後半は愛華に向けてというより自身に投げかけているようだった。
朱里の言葉を聞き、愛華の表情がみるみる明るくなっていく。萎れた華が水を得て元気を取り戻すかのようだった。
「分かってくれて嬉しい」
「言いにくい事でもあったんだ」
「そんなに？」

朱里は首を軽く動かして首肯した。愛華は改めて怪訝に思った。いくら考えを巡らせても目隠しをする理由が思いつかなかったからだ。
「でも教えてくれるんだよね。大丈夫、どんなことでも協力するんだから」
ずい、と愛華が体を押し出して迫ると、困ったような顔で朱里がたじろいだ。
「うん、まぁここまできたらいうしかないかな、って」と朱里は引け腰で答える。更にこう付け足した。
「その前に服着てもいいかな。ずっとこのままじゃ寒い」そういって床に落ちていた衣服を拾いあげ、袖を通した。そして彼女は気を取り直すように姿勢を正すと、愛華へと視線を向けた。
「えっとね」
「うん」
朱里はまたも顔を俯かせた。かすかではあるが耳に朱が差しているように見えた。
「……やっぱり」
「ダメ」
愛華は即答した。小手先の抵抗が無意味と悟ったのか、朱里は諦めたように息をついた。そして十分な間を置いて驚くべき事を口にした。
「自分の、は、裸が恥ずかしくて」
「へ？」
その告白は消え入りそうな小さな声だった。いってすぐ彼女は後ろを向いてしまった。
愛華は、すぐに朱里を前に向かせて続きを促すべきだったが、思わぬ言葉にぽかんと口が開いたまま固まった。今の自分は間抜けな顔をしているんだろうな、と少しピントのずれたことを考えていた。やはり気が動転しているのかもしれなかった。

第7話（2）　～愛華の場合～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読みいただきありがとうございます（ぺこり
愛華を中心として話を進めてみました。
いつもと少し違って感じられればいいな、と思います。

第8話　～告白～

落ち着け落ち着け、と愛華は自身に言い聞かせながら深呼吸をした。彼女は後ろを向いている姉へと手を伸ばした。肌越しに感じる体温はやけに熱い気がした。

「ほら、逃げないでこっち向いてってば」

愛華へ向き直った朱里はしかし、目は逸らしたままで両者の視線は交わらない。

「ごめん、意味分かんないよね」彼女はそのまま告白を続けた。

「……記憶がまだないのは知ってると思うけど」

当たり前だ、とばかりに愛華は頷いた。

「何ていうか鏡で自分を見ても、その……他人にしか見えなくて。それで、えっと」

ここで朱里は要領悪く口ごもった。血色の良い唇が閉ざされる。

先を促すために「うん、それで」と愛華は助け舟を出す。

「それで」一旦浴室に目を向けた後、愛華へと視線を移す。「他人としてみれば結構可愛いな、って」

躊躇いがちに出た言葉は、朱里でない者が口にすれば、それは嫌味か自信過剰のどちらかに値するだろう言葉だった。思わぬその言葉に愛華は衝撃を受けた。

「え？　あ、確かに可愛いけど……えぇっ！？」

「そんな驚かなくても」

姉は険しい表情で抗議の声を控えめに上げた。しかし、それが妥当な反応だということを彼女は十分に承知しているようだった。だからなのか、それ以上何も言わなかった。

愛華にその感覚は理解しかねた。いくら想像してみても、鏡を見ながら自身の可愛さに心が揺れる様など、到底無理な話だった。もちろん自分を不細工だとは思ったことはないし、日々可愛い女の子でありたい、という意識はある。だからといって、痛々しい自己陶酔に浸れるほどではなかった。それは単に記憶喪失を経験したことがないからだろうか、と彼女は考えた。一方で朱里の言わんとしていることが段々と掴めてきた。

「怒らない、怒らない」

「別に。どうせ、そういわれると思ってたし」

「でも私、お姉ちゃんなら許せる。お人形みたいだし、もっと武器にしてもいいと思うんだけどな」

朱里は相変わらずの仏頂面だった。けれど、纏う空気に微妙な変化があったことに気づいた。褒められることに慣れていないのか、その裏にある照れが隠せていないのだ。

「そんなことより」と、朱里が切り出す。その様子からは、朱里から言い出したことではあるが、出来ることならば避けたい話題にも思えた。

「あ、うん。続けて」

「それで」服の裾を撫で付けるように触れながら、朱里はいった。

「可愛いな、って思っちゃったら、その……やっぱり意識しちゃうというか。裸はドキドキしちゃうというか――」

聞きながら、何か引っかかりを覚えた。

「それっておかしい気がする」
愛華は姉の言葉を遮った。え、と彼女は愛華を見た。
「他人に見えちゃうのはあるかもしれない。でも、女の子同士だと思えばそこまで恥ずかしがることないと思うけどなぁ」
愛華の指摘に朱里は黙ってしまった。ばつの悪そうな顔をしている。
そこで愛華は閃くものがあった。あっ、と口を開けた。先ほどの彩乃との会話が思い出された。
「お姉ちゃん、ちょっと変なこと訊くけどいい？　あのね」
いいながら、愛華は少し迷った。こんなこと訊いていいのだろうか――

「今、お姉ちゃんって自分が女の子だ、っていう自覚ある？」
「それは……」
朱里は悲しげに目を伏せた。
「ごめんね。こんなこと、訊かれたくないよね」
その言葉に朱里は微笑んだ。無理に笑っているように見えた。
「正直にいうと、あんまりない」かも、と自信なさげに少女はいった。それが答えだった。
愛華は自らの直感が正しかったことを、改めて実感した。それと同時にもの悲しい感情が込み上げてきた。
「じゃあ」愛華はその感情を胸の奥に押さえつけながら、「自分が男の子だって――」口を開いた。しかしすぐに口を閉ざす。
二人はそれきり黙りこんだ。場に静寂が立ち込める。
妹は首を振った。「ううん、やっぱり何でもない」
さすがに躊躇いが生まれた。たとえそうだったとしても、口にすべき言葉ではないと彼女は思った。言ってしまったら、それがするすると現実味を帯びて実体化するのでは、と恐れたのだ。

姉を見る。無表情に近いが、いくらか和らいでいた。目が合い朱里の口がかすか笑みを形作る。

「ありがとう。やっぱり愛華は優しい」
「べ、別にそんなこと」
「でも……うん。だから、いいたくなったのかも」
「え？」

一人納得したような言葉に嫌な予感が走った。
「女の子、っていう感覚があまりないってことはだよ。つまり……僕は」
愛華は咄嗟に腕を伸ばした。朱里の唇に人差し指を縦にして当てた。形の良い唇がほんの少し沈んだ。
「いっちゃダメ」
遮られた朱里は驚いたような表情で妹を見上げた。なぜ、とその瞳はいっているようだった。
「何事も意識からだって。僕なんて使っちゃダメなの。その先は禁止」
「いや、でも……」
「でもじゃないの。以前は僕なんて使ってなかったし、記憶が戻りにくくなるかもしれないでしょ。こんな可愛いのに僕じゃ違和感あるし、それが癖になったら学校でも変に思われるよ、きっと。それに――」
「分かった、もう分かったから」
観念したようだった。辟易した顔をしている。
「よろしい」間延びした声でそれを見ながら、愛華は満足気に頷いた。

「強引だなぁ」呆れたような口調。けれどそれは嫌がっているような含みはなかった。ふふ、とどちらともなく、お互いに笑みを浮かべた。
そこでふと真面目な顔をして「それでね、私考えたんだけど」と愛華がいった。
「自分の裸が恥ずかしくて目隠ししてた。でもそれじゃ上手く身体を動かせなかった。まぁあんまり納得してないけどね」
目を閉じながら、状況を再確認するようにいう。
「私が洗ってあげれば良いと思うの」
空白。時が停止したかのような静けさ。朱里は閉口した。たっぷり時間を掛けて天井を仰ぎ、嘆くように手を眉間に置いた。
「何いいだすかと思えば」ふるふると首を振り、愛華へと視線を移し、力いっぱい告げる。「絶対やだっ」
その返答は予期していた。だから愛華は食い下がる。
「えー。どうして？　このままじゃちゃんとお風呂入れないよ？」
「どうしてって……分かるでしょ？」
「分かんないなー」
朱里は困ったような表情をしていた。愛華はそれを眺めながら頭の片隅で考える。
まさか毎回、介護のように自分が洗ってあげる訳にはいかないだろう。かといって、従来のまま目隠しさせての入浴など危険極まりない。となれば、多少強引に事を進めてでも女性に対しての耐性が必要となる。そこまで考えた結果、一計を案じることにした。

「聞いて、お姉ちゃん。このまま入らないのと、目隠ししてまた転んで痛い思いするのと、私に洗われるのどれが良い？」

「えぇっ。そんなの……」
困った顔をしていた朱里は、狩人に追い詰められた小動物ように慌て、頬を赤くして呻いた。
「ほらほら」
急かす声。いってからすぐにしまった、と思った。知らず嬉しそうに破顔する自分を認め、わずかな罪悪感に囚われたのだ。
一つ上の姉はフランス人形のように小さく愛くるしい容姿とは対を成すように、性格は明るく陽気で非常にさっぱりとした女性だった。その容姿と雰囲気から幾度となく愛で回したくなる衝動に何度駆られたことか。
事故以前から実際にじゃれ合う事は多々あった。しかし今は事故の影響なのか、別人のように控えめで大人しい性格である。そんな彼女を見ていると愛華は軽い意地悪を働きたくなる。その反応が可愛いからだ。それはまるで、中学生の男の子が好きな女の子にわざといたずらをするような、幼稚な感情。それでいてどこまでも純粋な感情。
そうだ、楽しんでいる場合じゃないんだ。もっとクールに淡々と――そう思い直したところで朱里が声を上げた。

「うぅ、分かった。洗ってください」
お願いする立場だからなのか、その言葉は丁寧語だった。面食らった愛華は「あ、うん」と生返事を一つ。
朱里は、といえば清水の舞台から飛び降りる覚悟をしているような、思いつめた表情をしていた。
「でも今回だけだから、ね」そういって、朱里は床に落ちてる布切れを拾った。
愛華は今回だけ、と念を押す朱里を見返した。では次回からはど

うするつもりなのか、と訝しみながら布切れを受け取った。

第8話　～告白～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読みいただきありがとうございます（ぺこり

お風呂ー、と前々話の後書きでのたまってから早3話目です。驚くべき事にまだ入ってません。自分が一番驚いています。

第9話　～自戒と自覚～

二人の少女は浴室に居た。
愛華の目の前には目隠しをされた半裸の少女がいる。プラスチック製のお風呂用の椅子にちょこんと腰掛けている。その後ろに張り付くように愛華が立っていた。
朱里の下半身には真っ白いタオルが、腰周りを半周する形で置いてある。
緊張しているのか、タオルだけでは心許ないのか、ぐっと身を硬くして握った手を膝の上に置いている。口は真一文に結んで何かに耐えているようだった。
愛華はTシャツにハーフパンツという格好だ。彼女は既に入浴済みである。もう一度、という選択肢はなかった。

――ヤバイ。可愛すぎる。
愛華の脳内を駆け巡るのはそんな若者言葉。他にぴたりと当てはまる形容詞が思いつかなかった。
少女の肌は透き通るような、むしゃぶりつきたくなる真白いわたあめ色。その反面、浴室の照明にきらきらと反射させられていて、それが余計に目を奪う。
同性であるにも関わらず、姉の裸体は危険な魅力を放っていた。平静という壁を取っ払い、鼓動を早めにかかってくる。ともすれば襲いたくなるような感覚。これはいよいよ本気で自戒に注力しなければ、と思った。

「じゃ、じゃあシャワー掛けるね」
返事はなかった。代わりにごくわずか、首を小刻みに動かしただけだった。余程注視しなければ気づけなかったのではないか。

愛華はお湯のマークが描かれている蛇口をひねった。少しずつひねり、シャワーノズルから出てくるお湯の勢いを調節した。ざぁ、という音と共に白い湯気が立ち上る。

朱里の目の前には、曇り防止加工の施された鏡が壁に掛けてあった。ちょうど顔より二回りくらい大きいサイズで、座ってればほぼ全身が映る形だ。

まず、朱里のつま先から足の甲にかけてお湯を浴びせた。いきなり掛けて熱すぎてはいけない、と思ったからだ。それと平行して、愛華は壁面から突き出ているシステムに目を向けた。そこには三十九度とデジタルの数値が表示されていた。

シャワーを掛けると、朱里の身体はぴくりと反応を示した。

「どう？　熱くない？」

「うん。大丈夫」

どうやら反射によって、身体が勝手に動いただけのようだ。触覚が敏感になっているのもあった。

「あの……シャワーくらいは自分で」

「まぁまぁ。私が全部やるから。だからお姉ちゃんは大人しく座ってて。はい、いくよー」

そういうと、彼女は朱里の足先からお湯を掛けていく。ノズルを緩やかに移動させて身体全体をすすいだ。髪の毛の部分も同様に、端っこの方から少しずつ少しずつ濡らしていった。薄いブラウンの後ろ髪が濡れて、濃厚色へと変貌していく。その間も朱里は一言も発することなく、首をすくめて寡黙を貫いていた。

「次は身体洗うね」

愛華はボディーソープをバススポンジに染み込ませた。

「さっきいってた」バススポンジを握りしめて、愛華はおもむろに口を開いた。「今回だけ、ってさ」

「う、うん」
「次回からどうするつもりなの？」
口をへの字に曲げて、朱里は何か考え込んでいるようにみえた。
そして一言。
「これから考える」
それを聞いた愛華は、身体全体を使うような深いため息をついた。
愛華の手の中で微細な泡がむくむくと膨れ上がってくる。その膨張はあたかも、愛華の胸中にある背徳感と一致するようだった。もちろん、これからあるまじき行為をしようという訳ではないのだが、眼前の光景を目にすれば無理もない話だった。
ゆっくりと朱里の手を取る。
「もう諦めて普通にお風呂入りなよ」
「それが出来ないから、こうやって試行錯誤してるんだってば」
むっとしたように朱里が反論した。
右手、左手とバススポンジがその艶やかな肌を滑る。そしてすぐに言葉を継いだ。
「なんていうか、その、裸を見ちゃうと頭が真っ白になるというか、ドキドキして何も考えられなくなるというか」
「まるで男の子みたいな反応だね」
苦笑しながら愛華は答えたが、朱里の目を見た瞬間に胸が鳴った。ほんの刹那であるが、彼女の目がせわしなく揺れたのだ。ほんの些細なそれこそありふれた冗談のつもりだった。それなのに姉の反応はまるで、自分はある種の禁句を口にしてしまったのか、と錯覚させられるほどだった。
しかしすぐに朱里は頬を膨らませ、「む。バカにしてるでしょ」といった。抗議の口調ではあるが、その中に棘は見当たらないようだ。瞠目（どうもく）との落差が激しい分、その一連の様変わりは心の揺れを誤魔化すための稚策なように思えてならなかった。
――やっぱり男っぽいって、気にしてるからなのかなぁ。
そんな想いから、先ほどの動揺には触れないようにしよう、と心

の中で帰結させた。
「そんなことないよ。ちょっとゴメンね」

愛華は泡だらけの右手で、朱里の胸へと手を伸ばした。途端、ん、と色のある息が鼻を通った。それは、思わぬ刺激につい漏れてしまった、という印象だった。
これは個人差があると思われるが、ナイロンタオルやスポンジ等だと刺激が強すぎるため、デリケートな部分は全て素手で洗っていくのが愛華の洗い方だった。ちんまりとした小柄な身体に似合わない存在感のある乳房。それをマッサージするような大仰な手の動きで、ゆっくり丁寧に洗っていった。
最初の鼻息以外に声はなかった。それに退屈感を覚えたのは確かだった。もっと敏感な反応を期待していて、それに対しての揚げ足取りを楽しみたかったのだ。それでつい、別ベクトルから仕掛けてみた。
「胸、気持ちよくなかった？」
そういうと朱里の後ろに回り込んだ。耳たぶに、ふぅ、と息を吹きかける。
効果は絶大だった。朱里は呻きとも喘ぎともつかない声を出して、身を縮みこませて両腕を抱いた。無数の鳥肌が見て取れる。
湿気と湯気でゆらゆらと揺れる視界。そこに控えめな照明が加わって幻想的に見えた。そんな不鮮明な視界でも、くっきりと分かったのは彼女の紅潮した顔と、情けないほどに下がった眉だった。
「な、ななな、何いって」
「もうお姉ちゃんったら、そんな慌てちゃってー。　もしかして我慢してたのかな？」
天使のような悪魔の笑顔で迫ると、朱里は再びあわあわと取り乱した。

先ほどの辛抱強い姿勢とは打って変わった反応に、愛華は途方もない充足感を知る。
何か事を起こす。それに対して反応が返ってくる。その反応がいちいち愛おしい。分かっている。これが歪んだ姉妹愛だということくらい、痛いくらいに自覚していた。けれどこれ以上エスカレートすることはないだろうと思っている。それで満足しているからだ。それ以上を望んでしまったら、何かが崩れてしまう気がした。

身体の全体を洗い終え、シャワーで泡を流した。次はシャンプーだ。
「お姉ちゃん、手を前に出して」
「え？　こうかな」
朱里は右手の手の平を下にして、無造作に腕を突き出した。空中でぶらん、と垂れている。
「違う違う、こうやって洗顔する時みたいに手の平でお椀作る感じで」
といいながら愛華はその真似をしてみせるが、目を布切れで覆っている朱里にそれが見えるはずもなかった。それでも分かり易い例えに従って、朱里は手でお椀を作るようにして、それを自らの胸の前に置いた。愛華はそこにリンス入りシャンプーを適量垂らす。
「はい、頭は自分で洗えるよね」
「洗えるけど……さっきと言ってること違う」
朱里は急激な変化に困惑していた。
「えへへー」
誤魔化すように笑いながら、愛華は手を伸ばした。その手は朱里を縛っている布切れへと移動し、結び目に触れる。そしてそのまま――解いた。

音も無く布切れはその役目を終え、床に落ちた。それだけがこの空間における異分子のようだった。

意味が分からない、という顔で朱里が鏡を見つめている。目隠しから解放されて、その表情の全貌がうかがえる状態だ。

鏡越しにその中の少女と愛華は目が合った。その少女の視線は愛華から外れたと思うと、鏡の中の胸部へと――

「わあああぁっ」

ようやく、といったところか、ワンテンポ遅れて、悲鳴のような声が浴室内を反響させた。

怖いものから目を背けるように、顔を斜め下に逸らせて俯いた。手の平に溜まっていたシャンプー液は床に垂れて、平べったく横たわる。

「な、なんで、こんなこと……」

動転しているのか朱里の声は震えていた。それでも何でもないことのように愛華は答える。

「次回から自分で入れるようにするために決まってるじゃない」

「そんなことといっても……こんなの自分じゃない」

吐き捨てるようにいう。愛華には、それが心の底から吐露しているように見えた。自分じゃない、自分じゃない――。妙に胸の中に渦巻いた。

「慣れなきゃ。これから何年、何十年とずぅっと付き合っていく身体なんだよ。大丈夫、よく見てみて。自分の身体だよ？　羨ましいくらい綺麗なのに、それを怖がるなんて勿体ないよ」

きっとこうなると思っていた。それでもここは避けて通れない道だと思った。荒治療になってしまうが、ここさえ通過出来れば大きな一歩になると考えた。

愛華は自分の手の平にシャンプーを垂らした。手で泡立てて朱里

の頭を撫でる。彼女の髪が泡に包まれ始めた。
「ね。ちょっとずつでいいから。まず目を瞑りながら、シャンプーでゴシゴシして」
そういって、愛華は手を離した。すると意を決したように朱里はおずおずと緩慢に動き始めた。目は瞑ったままだった。
「うんうん、そう。その調子だよっ。最初は薄目でいいから」

朱里は指の腹で爪を立てないよう丁寧に洗いながら、時折思い出したように恐る恐る目を開けていた。鏡の中の自分を認めると勢いよく、瞳を閉じる。それを何度か繰り返していた。そして、段々とその間隔が少なくなっていった。
やがて洗い終わったのか、朱里が腕を伸ばした。何かを探すような仕草だった。一瞬で理解した愛華はシャワーのノズルを手渡した。そして蛇口をひねる。
朱里は自分で頭をすすぎ始めた。お湯を止めると同時に陰影と光沢のある毛髪が姿を現す。透明な雫が無数に滴り落ちていく。まるで砕かれた呪縛の破片のようだった。

見れば、彼女は鏡を前にかすかな前傾姿勢をとっていてはいるが、その視線は鏡から外れてはいなかった。
「お姉ちゃん、やったっ」
愛華は服が濡れるのも構わず、朱里に抱きついた。
照れるように笑った朱里は「まだちょっと恥ずかしい」と、控えめに感想を漏らす。
「でも、もう一人でお風呂入れるでしょ？」
「ドキドキするけど、何とか」
「おっきな進歩だよ」くすり、と朱里に笑いかける。

やって良かったと愛華は思った。強行するにあたって、嫌がる朱里を見るのは辛かった。けれど怪我されるのはもっと嫌だった。

「今度は一緒に入ろうね」
愛華が満面の笑みで提案した。敗色が濃いと分かっていて口した。駄目で元々である。
「それはちょっと」
朱里は目を見張り驚いた表情をした。やがて苦笑交じりの顔になると、やんわりと拒否の意を示してきた。
「えーっ」
傷ついた振りをしながら、愛華はぼんやりと考えていた。
ここまで性に免疫がないのは仕方ないとしよう。鏡に映る自分が恥ずかしい。では、他人に自分の裸体を見られることに羞恥心はないのだろうか――
多分ないのだろうな、という結論に至った。まだまだ彼女は自分のことを自分と認識していないようだった。ならば、その裸体を見られても、それはあくまで他人事なのだ。だから羞恥心も生まれない。彼女が問題にしていたのはその瞳、レンズに映る内容の方だ。その先に羞恥の源がある。それが全てだったのだ。
それを質問したらどうなるだろうか。いや、と愛華はすぐにその思考を打ち消した。新たな懸念素材になりそうな気がしたからだ。その想いを胸の奥に仕舞いこみ、浴室の扉に手を掛けた。
「もう大丈夫だね」
そういって振り返ると、姉は既にお湯へと身を沈めていた。こくり、と首が動くのが見えた。それならば、ここに居る意味はない。眼福眼福、と心の中で唱えながら浴室を後にした。

第９話　～自戒と自覚～（後書き）

ども。作者です。
ここまでお読みいただきありがとうございます（ぺこり

えっちぃ描写が出来ません。
もちろん、Ｒ１８未満での範囲内で、です。
要精進です。
次回は彩乃さん視点な予定……かも。

ご感想、評価、ご意見、ございましたらお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9383t/

Still,

2011年10月9日05時49分発行